

平成 15 年度老人保健健康増進等事業報告書

痴呆性高齢者の在宅生活を支える地域ケアサービスの方策に関する研究
下部研究

ボランティア育成・活用に関する研究報告書

社会福祉法人 浴 風 会
高齢者痴呆介護研究・研修東京センター

はじめに

痴呆性高齢者ケアの分野では、グループホーム、ユニットケアという新しい居住(援助)形態の出現・普及とともに、個人の人権、尊厳、自立を重視した個別的ケアが促進されている。しかしながら、いわゆる従来型といわれる4人部屋を中心とする回廊式等の特別養護老人ホームや老人保健施設あるいは療養型医療施設で生活する痴呆性高齢者も多く、近々にこれらの施設のすべてがグループホームやユニットケア施設に切り替わるわけではないので、在宅生活者を含めて居住場所を問わない「人権、尊厳、自立を重視した個別ケア」のあり方を構築していく必要がある。

本研究では、

※「地域生活支援」は在宅生活者に限定した援助コンセプトと考えるべきではなく、居住場所を問わず、痴呆性高齢者を含むすべての高齢者が地域を生活の場とすることを理念として設定し、高齢者が社会と隔離された生活を送ることを余儀なくされていることが多いのが実態である従来型特別養護老人ホームと比較的外出支援を行いやすいグループホームにおいて、外出支援のあり方を検討することを目的とした。目標は、ボランティア等を活用した随意的外出支援体制の構築(高齢者の地域社会資源の活用)である。

特別養護老人ホームに生活する高齢者の外出支援に関しては、職員や高齢者本人の意識・意欲の問題だけではなく、財源・人手不足を原因とする援助体制の問題があり、行動の自由に付随する事故に対するリスク・マネジメントの問題もある。家族の意識や契約のあり方という問題もある。したがって、本年度は外出支援の基礎的研究の年と考え、職員および高齢者本人の意欲の醸成と絶対に事故のない形での外出支援の試行によるノウハウの修得を課題とした。

結果としては、感染症の流行等突発的事態の発生により思うように進まなかった点もあったが、一定の成果は得られたように思われる。このような研究は、単年度で終了・完成するものではないことから、実践手法の一般化と全国普及を目標に、今後も研究が継続されることが望まれる。

平成16年3月31日

研究委員会委員長

高齢者痴呆介護研究・研修東京センター副センター長 中島 健一

目次

はじめに

第1章 現状と研究の意義	3
第1節 痴呆性高齢者の捉え方と研究の意義	3
第2節 介護老人福祉施設の現状と職員	9
第3節 施設で生活する痴呆性高齢者の外出を支援する意義	12
第2章 外出支援の実践	14
第1節 意向調査	14
第2節 実践の結果	17
1. 打ち合わせ会議	17
2. 外出支援試行の内容	29
3. 具体的な試行の内容	30
4. 実践してみたの職員の感想	59
5. 考察	66
第3章 痴呆性高齢者の外出支援における対応(外出支援対応マニュアル試案)	81
まとめ	86

第1章 現状と研究の意義

第1節 痴呆性高齢者の捉え方と研究の意義

高齢者人口が 2400 万人を突破し、人口に占める割合も 19%となった。高齢化が進むにつれ痴呆になる人も増えている。厚生労働省が昨年発表したデータによると、2002 年の介護保険の要介護認定者は 314 万人で、そのほぼ半数の 194 万人が何らかの介護や支援を必要とする痴呆性高齢者である。そのうち在宅での要介護者の 3 人に 1 人、施設入所者の 8 割が痴呆性高齢者である。さらに団塊の世代が高齢者になる 2015 年には、その数が 250 万人になるともいわれ、痴呆は、今後の高齢者の介護を考える上で避けられない課題である。

1. 痴呆性高齢者の理解の現状

(1) 痴呆性高齢者への理解

痴呆性高齢者は増加していくことが予測されているが、痴呆に対する一般的な理解はなかなか進んでいない。痴呆は、記憶能力や判断力、問題解決能力などの認知機能障害で、慢性で新構成の経過をたどる脳疾患で、日常生活に支障をきたすようになる。痴呆症は病気ではあるが、記憶を中心とした知能のいろいろな面が損なわれているが、人間らしさを失った存在ではない。医療で治療をすれば直るというものではないが進行を遅らせることは可能であると言われている。早期発見で適切な医療や福祉を活用して、その人らしい生活が継続していけるようにすることの研究がなされるようになってきたが、まだまだ一般の人たちは「年のせいだからしょうがない」と思っている人が多い。

痴呆性高齢者を抱える介護者の多くは、予測できない行動や日常生活でのちぐはぐな行動に介護負担を感じストレスになっている。普通に生活してきた家族の誰かが痴呆になることによって、その影響は大で、それまでの生活の継続が難しくなることも少なくない。また、在宅での生活が限界になることも多い。一方、在宅から施設入所を希望しても、何年も待機しなけ

れば入所できない状態である。

痴呆性高齢者への対応もまだまだ一般的な理解は得られているとはいえない状況である。痴呆の初期は、生活を共にする人たちがわからないまま生活をし、時折痴呆の行動に直面してもそれほどの支障も無く生活を送っている。物忘れが顕著になり、生活に支障が出てきても、痴呆とは捉えず誤った行動を注意したりしてプライドを傷つける対応をしていることも少なくない。対応のまずさが、より痴呆の症状を悪化させてしまうことしばしばである。痴呆性高齢者の増加と共に、在宅や施設の職員が痴呆性高齢者への対応を適切に行えるように、研修の必要性が求められてきた。

(2) 痴呆性高齢者の介護に専門性が必要

従来は痴呆性高齢者への理解がないまま介護をしていた。その人らしい生活ができるようにとは思いながらも、現実にはどのように対応してよいかわからず、問題行動として捉え、解決策を考えるというより、どのようにしてその場を切り抜けるかだけで場当たりの方法で対応し、かかわる職員も途方にくれるばかりであった。

施設や在宅で、痴呆性高齢者の介護に携わる人たちは、試行錯誤的な発想で、様々な取り組みを模索し失敗を繰り返しながら、痴呆性高齢者にかかわるための知識や技術が必要であることが実感された。同時に、自分たちの取り組みを発表したりしていくうちに、介護にも専門性が必要であることがわかり研修や学習会が開催されるようになった。

(3) 養成校や研修で学ぶ

痴呆性高齢者の介護にかかわる人たちに、痴呆に関する基本的知識や理念、介護の展開方法などを学んで、適切な介護ができるように研修が行われるようになってきたことは、ごく最近のことである。痴呆性高齢者にかかわる人たちの数も、当然、痴呆性高齢者の増加と共に増えてきたがまだまだ研修を受講する機会は少ない現状である。

介護の養成校も増え、そこで痴呆についての知識や介護の展開方法を学んでくる人たちも増えてきた。介護の専門職は増えてきたが、まだまだ教育は不十分で、卒後の教育が必要である。

2. 痴呆性高齢者の捉え方

(1) 高齢者の基本的理解

老年期は衰退の時期と考えられてきたが、平均寿命も延び 80 歳を越えた今は、老年期は人生の 4 分の一を占める長さとなり、この時期を自分多らしく生きることが、重要な課題となってきた。老年期は身体・運動・精神面などの機能は、若いころに比べれば衰えることは事実であるが、そのことばかりを見るのではなく、機能の衰えがあっても、残存機能を活用しながら、生き活きと楽しく、自分らしく生きていくことがよりよい老年期であり、より良い人生といっても過言ではないと考えられる。

人は生まれてから死ぬまで、環境に適応しようとして発達していくといわれている。当然、高齢者も発達していくという考え方であり、様々な変化に対してその人らしく生きていくのである。

また、生活の環境は様々であるが、周囲の環境に応じて、その環境の中で自分らしく生活していく、つまり、様々な環境に適応しながら生活をしているのである。高齢者は、心身機能の低下により、環境への適応も低下してくるため、環境のほうをその人に合わせて変える必要がある。痴呆性高齢者などは、適切な接し方や対人関係である社会的環境を整えることで安定した生活ができる要因になる。

一人ひとり違った生き方や生活をしていることは、自然であるし、当たり前のことである。それぞれの人生は個別性の高いものである。高齢者を心身機能の低下した人と人くりにして見るのではなく、一人ひとりのいき方や生活は違うのであると理解することが基本である。特に痴呆性高齢者の介護を考えるときは重視することを忘れてはいけない。

(2) 痴呆性高齢者の介護

痴呆になると、わからなくなることが多くストレスもなくなるのではないかと思う人がいるが、そうではない。痴呆性高齢者自身は自分の思うことを適切に表現できなくてストレスや違和感を感じても、それを適切に表現できないばかりか、他者から見ると、問題行動と捉えられてしまう。痴呆の介護は、痴呆性高齢者を取り巻く人たちが痴呆性高齢者を理解し、共に生きるという姿勢が必要である。介護をする人たちが、環境を整えたり、援助するときに配慮することが大切である。環境は狭い生活空間だけでなく、社会的な環境を含めて考え、改善する必要がある。

介護は人と人とのかかわりであるため、介護をする人の質が直接影響してしまう。痴呆性高齢者と介護者の間には、人間としての響きあいがないと、単なる手としての援助になってしまう。人として対等な関係が基本となる。

3. 痴呆性高齢者の外出支援の意義

(1) 外出は生活と密着し、当然の行為

生活をするためには、さまざまな行為があり、外出は当然の行為として行われている。例えば、仕事、日々の生活のための買い物、近所とのお付き合い、友人との交流、趣味や娯楽、散歩、その他様々な目的を持ち外出を自然に行っている。高齢や障害で歩行が困難になったり、痴呆でひとりでの行動が不自由になると、屋内での生活が主になってくる。他者の手が必要になると行動範囲は狭くなり必然的に外出は少なくなるのが一般的である。しかし生活は継続しているのである。一人の人間として生活するということは、外出も生活のひとつの要素として当選の行為である。

(2) 生活にメリ・ハリが必要

毎日、穏やかに生活を継続していくことは重要であるが、平穏に生活ができていて、こころ

が十分かというところばかりではない。リズムある生活とは、ただ単に時間が過ぎていくのではなく、メリ・ハリのある生活があるから生き生きできるのではないだろうか。外出をするための計画を立てて、準備をし、その日を迎えて実行する、そのプロセスも楽しみにもなり、少し緊張することで生活にメリハリができてくる。

(3) 良い刺激となる

同じような毎日の繰り返しで、会う顔ぶれも同じで安心した時間が過ぎていくことは良いことであるが、刺激や緊張感はない。時には、外出することで、良い刺激を受けたり、少し緊張することでこころの活性化が図れる。また、社会と触れることで、忘れてしまった思い出や過去の記憶や体験を思い出す糸口になることもある。記憶力、理解力、推理力などの知的機能が低下していても、かつて自分が関わっていた社会と触れることで、心のどこかに響く刺激となると思われる。

(4) 感動する

痴呆により周囲の状況が飲み込めず、その場にふさわしくない行動が見られると、危険防止を考えて、周りに物を置くことすらなくなってしまい、何か見たり触れたりして感動する機会を失いがちである。痴呆性高齢者で、知的な理解はできなくても心は生きているのであるから、感動できるような状況を作らなければ無感動のまま過ぎてしまう。痴呆性高齢者は言葉では表現できないが、美しい風景に接したり、無邪気な子どもや動物に触れると、表情が変わることは多くの介護者が体験していることである。危険でない感動できるような状況を意図的に作ることが大切である。

(5) 安全に行動できる

痴呆性高齢者は予測できない行動をとることが多く、職員は安全を優先して見守りができる

範囲で行動半径を狭めてしまいがちである。安全面から考えるとやむをえない状況もあるが、常に煮との眼が光っている中での行動は精神的な負担があると考えられる。人の目での見守りもなくてはならない援助ではあるが、一人でも安全に行動できる環境を整え、時には介護者の目を離れても安全に行動できることも必要である。外出支援の場合は、十分に下見をして、本人が自由に行動できる場面を設定することも良いと考えられる。様々なことを予測して。対応できるように準備や心構えを共有化しておく必要がある。

(6) 積み重ねが次の計画を成功させる

外出をするためには、準備や付き添いにかかなりの神経を使って初めて実現できるものである。外出の場面のその場その場では感動や感激があり、付き添った職員は苦労を忘れる瞬間でもあり、次の計画が頭によぎるものである。しかし、当の本人は確かにその瞬間では心が動いて表情も変化するが、場面が変わるとそれを忘れてしまう。痴呆性高齢者であるから当然のことであるが、後日の話題にも活用したいので、思い出となる写真などを残しておく、そのときの感動が思い出されるきっかけとなる。同時に記録なども残しておく、次の計画に役立つ材料になる。一つ一つの積み重ねから工夫が生まれ、柔軟な対応ができるようになる。

(7) 介護力がアップする

外出支援をするために付き添う職員は、痴呆性高齢者の特徴を理解すると共に、利用者の個別性を把握しなければならないので、今までの知識だけでなくさらに学びを深くし工夫をしないとより良い援助とはならない。そのために、学習会や研修会に積極的に参加するようになる。また、計画の段階から協議しなければならないので、職員は利用者の個別性を理解するために観察をしたり、地方の特徴を理化するための知識を学び、それらを活用し見直しを繰り返すことで介護力がアップする。

第2節 介護老人福祉施設の現状と職員の意義

2000年に介護保険制度が実施され、介護保険制度は利用者本位、高齢者の自立支援、利用者による選択が基本理念となった。それまでの特別養護老人ホームの措置から契約へと移行し、利用者は自己実現のために多様なサービスの中から必要なサービスと自ら主体的に選択・決定して利用する仕組みとなった。利用者と事業者が契約において対等な立場で向かい合う関係になった。また、入所年齢は従来の65歳以上から、要介護状態にある40歳以上の人も利用できるようになった。施設の役割も従来の役割をにない、新たに施設で安定し要介護状態が改善し、家庭復帰の条件が整うならば在宅復帰も可能となることから、在宅復帰の支援も視野に入れたサービスが位置づけられた。施設での生活は様々であるが、一般的には家族とはなれた生活や集団生活による制約はあるが、家庭に変わって安心できる生活の場である。

1. 介護老人福祉施設の現状

介護保険制度が実施されても、利用者の生活そのものが変わることはない。しかし、運営面では従来の措置制度と違って、介護保険制度では経営面を考慮せざるを得なくなった。効果的に効率的に経営していくことは、経済原理から見れば当然のことであるが、経験のないことなので試行錯誤的な方法で展開されている。職員の人数なども決められているが、常勤職員だけでなく非常勤職員の増加が多くみられるようになった。

一方では、介護の教育を受けた職員や経験をつんで介護福祉士を取得していく働く職員が多くなり、介護の知識を持った人が働く場となりつつある。入職すると、新人研修など職場で働くための研修や、質の向上のための職場内研修や職場外の研修などが行われ、基本的な知識を元に応用できるような取り組みが一般的になってきた。痴呆性高齢者への対応なども痴呆介護の基礎過程や痴呆介護指導者養成研修などが実施され、理解を深め実践できるようなシステムが整いつつある。そうは言いながらも実際の現状はなかなか外部研修を受講

できる体制にはなっていない施設も少なくない。

2. 入所者の特徴

介護保険制度の導入により入所者は、要介護認定を申請し要介護度1～5までの人が対象になった。費用の面では、従来の費用徴収から1割負担となった。介護老人福祉施設は、要介護度が高く介護がかなり必要な人たちが利用するようになった。在宅で生活を継続することが介護保険制度の目的であるにもかかわらず、介護老人福祉施設への入所希望者は増加の傾向で待機者が多い現状である。また、介護保険制度では40歳から利用できるため、入所者の年齢差が広がり、生活してきた歴史・文化的背景や、価値観の違いが多様になった。

3. 痴呆性高齢者の増加と対応

高齢社会に伴って痴呆性高齢者が増加してきたことにより、介護老人福祉施設への入所者も同様に痴呆性高齢者が増加してきた。この傾向は今後一層増える可能性が大であるため、痴呆性高齢者への理解や対応を専門的に学ぶ必要が出てきた。介護老人福祉施設では痴呆性高齢者を集めた棟や痴呆性高齢者の専門施設としての対応など様々あり、その施設の理念などが反映されるようになってきた。介護内容なども第三者評価や施設の広報誌により公表することによって、入所希望者や家族は施設を選ぶことができるようになった。

4. 職員の対応

(1) ケアプランの作成

介護保険導入により、ケアプランの作成が位置づけられ、個別のケアプランを作成し、それにそって介護を実施し記録や評価を残すことになった。従来も個別のプランは、個別援助計画として利用者の意思を尊重しながら作成し実践していたが、それほど重きをおかずに実践が先行していた。記録なども行った記録を記すことにおわり、振り返って検討することは少な

かったようである。

ケアプランを作成するためには、アセスメントをしなければ作成できないため、利用者個人の生活のこだわりや個別性を細かく観察するようになってきた。観察をするためには、痴呆に関しての知識がないと適切な観察はできないので、知識や技術の向上が求められるようになってきた。

(2) 介護の根拠やリスクマネジメントの必要性

介護するには介護する根拠があって実践するのであるから、その根拠を明らかにすることが要求されてきた。当然のことであるが、従来は経験の中での介護がされてきたので、頭ではわかっているけれども文字で文章化することはなかなか簡単にはいかない現状であるが、ケアプランに介護の根拠を明らかにするようになりつつある。介護の根拠を明らかにすることは、特に痴呆性高齢者においては予測できない行動が多いため、危険防止や危険回避のためにも重要である。また、事故などが起こったときの説明にも介護の根拠は欠かすことのできない要素であるし、家族からの介護内容の開示が求められた場合も同様である。

(3) 生活の活性化には楽しみが必要

施設での生活は、専門職たちがそれぞれの専門性を発揮し滞りなく過ぎていくが、生活をする利用者にとっては単調に思える場合もある。特に痴呆性高齢者は、様々な点で見守り援助が必要であると共に、安全に生活が継続できるように配慮するあまり刺激もなく過ごしがちな生活ではなく、時には外部と触れることも人として大切なことである。痴呆性高齢者であっても、周到な計画を立て準備することで安全で楽しい外出はできるし、実践を通して更なる工夫が必要である。

(4) 施設としての取り組みが必要

職員としては、痴呆性高齢者の楽しみとして外出を考えていても、施設としての取り組みがシステム化されていなければ実行することは難しい。外出をすることでのメリットとデメリットを明確にして、施設での外出が上げさなことでなく、ごく一般的に日常化することが望ましい。そのためには、先行研究から自分の施設で具体的な取り組みができるノウハウが必要となっているのが現状である。

第3節 施設で生活する痴呆性高齢者の外出を支援する意義

痴呆性高齢者が施設で生活するだけでも手一杯の現状では、さらに地方を進ませしてしまうことにもなりかねない。人手が不足しているからできない現状ではあるが、そこからどのようにすれば外出支援をすることができるのか模索する必要がある。できない原状からできる現状にするにはどのような方法があるのか試みるのが次のステップになる。確かに、痴呆性高齢者であるから、職員がどんなに周到な準備をしても予測のできない展開になったり、苦労して外出してもその場ではこころが響き感動しても、時間がたてば外出したことさえも忘れてしまうことは多々ある。それでもそのとき、その場面では確かに心が動いているのである。連続した生活というより、点、点で生きているように思えるが、その点がそのときに充実してこそ人間らしい生活ができる。地方性高齢者の QOL の視点から外出支援は大きな課題である。

1. 研究の意義

痴呆性高齢者がますます増えて施設入所も増加している。しかし、まだまだ施設の中だけで完結した生活が多い現状がある。一方では最後までその人らしい生活の継続が求められ、QOL の向上に目が向けられている。痴呆性高齢者の専門的なかかわりが必要であることがわかり、かかわり方によってはより安定した生活、さらに痴呆の進行が遅くなることも明らかになりつつある。施設の生活を豊かにするためのひとつの方法として外出支援をする具体的な

マニュアルの必要性が出てきた。

2. 今回の研究方法

(1) 目的

痴呆性高齢者であっても、本人らしい生活が継続できるようにしていくことは当然のことであるし、本人主体の生活の創造からも外出は必要なことである、本人の要望をかなえるためにも、必要に応じて外出支援をする体制を整えることが大切である。現状の施設では、様々な理由から施設の中だけでの生活になりがちである。そこで、具体的かつ現実的な外出支援マニュアルを作成し、ボランティアの活用を含めた実現可能な外出支援のあり方とその方法を提供することを目的とする。

(2) 事業実施計画

- 外出支援の意義を明らかにする
- 外出支援介入方法の検討と実施
- ボランティアの活用方法の検討

(3) 事業内容

研究委員会を設置し、委員会を開催、外出支援の実践と具体的な内容方法について検討する。

以上を踏まえて、外出支援マニュアルの基本を作成する。

第2章 外出支援の実践

第1節 意向調査

松野有希子

われわれが生活するうえで、外出は欠かせない。外出には前もって準備や計画をする一種のイベント、遠出と、ちょっと外に出たくなったり、ショットして用事を片付けたりする日常の外出とがあるが、そのどちらもが満たされて、われわれは、社会とのつながりを感じたり生活の張りを得たりしているといえるだろう。しかし、施設入所している痴呆性高齢者の例を見る場合、そのどちらの外出にも充分対応できているとはいえない。大型施設では、例えば花見といったような行事的な外出にとどまったり、グループホームなどの比較的小回りのきく施設でも職員の手がすく時間を外出に当てたり、散歩の時間としてあらかじめ枠取りしてある時間を使ったりとある程度スケジューリングされた範囲での外出にとどまっている場合が多いだろう。スケジューリングされたものであれ、外出の機会が持てるのは評価されるが、本来我々は、より自然に、外に出たいと思ったときに外に出ているのであり、痴呆性高齢者においても外に出たいという気持ちが湧いたときにそれを萎えさせてしまうことなくその場で対応できることが理想的である。現在のところ、外出に伴う危険性、人手不足、費用の問題、個人の要望を十分に把握しきれていない問題などを理由として、実際に外出を援助したいとの思いが職員の中にあつたとしても、取り組みにいたらしく見過ごされている状況が多いだろう。痴呆性高齢者が外出を楽しむことは当然のこととして受け止め、なかなか外出が実現できないでいる現状の問題点や課題に取り組んでいくことが大切である。

今回の研究においては、まず、実際に外出を試みその中でどのような問題があるか課題を明確にし、取り組みの足がかりを得ていくことから始めた。そして、その前段階として意向調査を行った。内容は以下の通りである。

1. 目的

日常生活におけるちょっとした外出に応じていくことを考えた場合、安全性の面からも、個々の要望に沿うという面からも、地域にどのような資源や危険があるかあらかじめアセスメントしておく必要がある。また、同年齢の方が日ごろどのように外出を楽しんでいるのかも参考になると思われる。このため、今回外出支援を行う施設と同一敷地内に住む、痴呆でない高齢者から、同年代の目線を通した地域の情報を収集する

2. 方法

本研究及び意向調査の趣旨に賛同されたケアハウスの住人 10 名と茶話会を開き、ざっくばらんな情報提供をしてもらった。その際①地域の地図(道路や主な建物を書き込んだ手作りの大型地図)を用意し、そこによく利用する店屋施設の情報、その他の耳寄り情報、注意情報を書きこめるようにした。また、②簡単なアンケートを用意し、参加者の大まかな外出状況を把握できるようにした。アンケートの質問項目は、次の通りであった。①平均すると週に何回ぐらい外出しますか。②乗り物を使った外出は月に難解ぐらいありますか。③主な外出先を教えてください。(選択式・複数回答)、④よく立ち寄られる場所を教えてください。(自由記述)⑤できれば行ってみたいと思う場所ややってみたいと思うことがあったら教えてください。それは何があれば実現できますか。(自由記述)

参加者は、10 名であった。(男性 1 名、女性 9 名、年齢範囲 68～94 歳、平均 80.5 歳、全員が仕事についていた経験をもち、また、活動を制限する身体の機能障害はなかった。)

3. 結果

地図への書き込みによる情報の収集については、意図したような地域情報は得られなかった。その理由として参加者は居住地周辺の焦点施設の利用は食料品を買うスーパーと 100 円ショップにほぼ限っており、その他の外出には電車を利用して都心の繁華スポットを中心に

利用していた。居住地が都心に近く、交通(電車)の便のよさもあってか、行動範囲は都心をまたぐ幅広いものであった。(吉祥寺、渋谷、日本橋、上野など)

参加者の外出傾向については、外出頻度は、散歩も含めると毎日外出している人が4名、週6日が2名、週5日が1名とほぼ毎日といえる人が大半で、週3~4日が3名であった。外出には乗り物を使うことが多く、つきに20日以上利用している人が6名と半数以上、10日以上利用が2名、10日未満の利用が2名であった。外出先は散歩、習い事(短歌、俳句、習字、体操、コーラス、スイミング、フラダンス、講演会など)習い事の指導(気功、フォークダンスなど)、観劇、歌舞伎、音楽界、映画、展覧会、子どもの家、墓参り、教会、図書館、仕事、食事、デパート、公園などが挙げられ、また、いきたいところに廃棄、やりたい事はやれているので、「できれば行ってみたい、できればやってみたいこと」は特にないと意見であった。

4. まとめ

結果を受けて確認されたことは、年齢に関係なく、我々の生活において以下に外出が日常生活を密接につながりを持ち、また人によってバラエティに富んでいるかということであった。今回協力いただいた高齢者は、人数も条件も限られ、平均的高齢者を代表しているわけではない。また、身体的にも経済的にも比較的恵まれた状況にある人たちであった。しかしそれは、単に特例を示すのではなく、条件さえ整えば、今回聴取されたような豊かな外出を多くの高齢者が希望する可能性を示していると考えられる。そして、施設において外出するK次回が大きく制限されていることが、いかに不自然な状態であるか、痴呆を持つことで以下に不自然な環境に置かれやすいかを示しているともいえるだろう。

今回の意向調査では、外出を実現していくことの意義を再確認することが出て、今後痴呆性高齢者の外出をより豊かにしていくこと(量的にも質的にも)の重要性が改めて示されたと言える。

第2節 外出支援の実践

1. 実行委員会打ち合わせ会議

(1) 打ち合わせ会議の日程

打ち合わせ会議は、年度内に計 6 回実施された。委員会の目的は、主として外出支援の実践方法についての検討と、実践結果と報告であった。以下にその概要について整理した。

(2) 第 1 回 委員会における検討内容と決定事項

1) 外出支援の実践方針について

- ① 基本的に外出支援に関して準備の時間を含めて、勤務内でできるように工夫する。
- ② 準備の手続き・プロセスについても検討する。
- ③ 委員会の検討事項にボランティアの活用やケア体制の変更も含める。
- ④ 現場のスタッフの意見を極力吸い上げる。

2) 実践の方法について

実践の方法については以下の手順で行う。

- ① ケアハウス・経費老人ホーム等の入居者に対する外出の実態調査
- ② 環境アセスメントと外出に関するアンケートを委員中心で実施し、どのような外出ができるかを考える
- ③ ビデオやカメラを記録として使用する。その際のインフォームドコンセントには留意すべきである。
- ④ ビデオについては、外出の導入時の刺激としての使用方法(ご近所アルバム、パチンコ屋、競馬場の映像等)もあるので活用する方法を考える。その他外出したくなるような仕掛けを考えていく
- ⑤ またビデオは帰ってからの反省会や、職員の啓蒙に活用することも考える。
- ⑥ 外出希望があり、比較的 ADL の高い外出しやすい人から誘ってはじめていくとよいだろう。
- ⑦ ただし、いかに自然に外出支援につなげるかが大切になってくると考えられる(日常のケアとの連続性)。
- ⑧ 地域の社会資源についてどのようなところがあるか調べておく

3) 外出支援のアイデアについて

- 外出先にいるボランティアを活用できる

- 近隣の福祉関係の学校に対してPRを行っていくとよいのではないか

4) ボランティアの活用について

- 外出計画しても完全に計画通りにはいかないものなので、そこを補完する役目を常勤職員が担っていた。
- 地域の人々の理解を得ることができるようになると、地域の人が行き先などの情報を入れてくれるようになった
- ボランティア対象の講座を開いた。

(3) 第2回 外出支援委員会

1) 外出支援の具体策の提案

- 寒くなるまで時間がないという現状があるので、具体的に計画を立てて、実行に移す。
- ボランティアの活用等長期間継続して続けていくために、考えるべきことは多々あるが、とりあえずまずは、一回外出してみても感じをつかんでもらうということから始める。
- この結果を受けて、ボランティアにはどのようなところを手伝ってもらえばいいのか、どのような点を事前にアセスメントしておけばいいのか等を考える。
- その際、今までのケアの経緯も踏まえて、考えられる危険等については考えておく必要がある。加えて外出する高齢者のアセスメントもしておく必要がある。

2) 進行の方針・具体策について

① 南陽園

特別に時間をとってということだけでなく、お茶を配りながらどこに行きたいか聞いてみた。歌舞伎、浪曲、すし、パチンコ、自宅などの意見が出た。近隣のすし屋にお風呂がない日、1時間程度で行ってみたい。

② 第二南陽園

以前はフリープランの日があった。そのような形でできたらいいのだが。喫茶の日があり、テラスに出たりしている。

③ 第三南陽園

勤務が厳しいところがあり、半休を取って付近のアセスメント等準備することはできるが、勤務内となると新人が多く、スタッフがまだまだのところがあり、心配がある。

④ グループホームひまわり

パリ、高円寺等いろいろ意見が出た。月に1回〇〇さんの日ということで、決めて実施することも考えられる。ボラは、ついてくる人よりも中に残る人が必要だろう。関係がある人でないと難しい人もいるので、利用者がボランティアに慣れるためのプログラムを考えるということも必要である。

● 日常性を重視する必要はあるだろう。特養では必然性を出せる雰囲気があるか
→施錠してある等環境面の悪さはあるが、靴下に穴が開いているので売店に行こう、テレビが来ているから見に行こう、お見舞いに行こうなどといって外出することがある。また、目的がなくてもふらふら歩くということにも意味がある。

→部屋の中にいると頭が変になっちゃうから外に出ましようか？という「うんうん」といわれることもある。

→このようなことを職員が楽しめるようになる雰囲気がフロアに出てくるといい。

● とりあえず、実行してみるということを優先する必要があるか。各施設の状況に合わせないと無理があるのでは。

→やってみてこれが足りない等わかるところがある。また、今まで関わってきている人なので、どの程度の外出なら可能か等アセスメントも困難ではないと思われる。短い期間で、また忙しい中で実施していくのは非常に大変だがここは一気に頑張してほしい。

● 寝たきりで痴呆の人が、通院で外出する機会があったとき普段とは違ったいい表情、反応を見せたことがあった。そういう一面を見ることがやる気につながると思う。しかし、現状では業務をやるのが仕事であると思っているところがあり、そのようなことを解き放つことから、じっくりはじめたらいいのではとも思う。逆にやってみてよかったという経験も大事というところもある。

(4) 今後の方針

- さしあたって外出支援の計画を立てる
- 次回までに最低1回は外出支援を実行する
- そのときの準備等にかかった時間・話し合った内容については記録しておく
- また実施する中で、環境アセスメントもしていく
- 安全かつ希望のある人、外出しやすい人に働きかける
- 計画が立ったら調整役となる中村委員が付き添えるように調整する。
- 条件としては、10月の後半歩くとして常識的にいける範囲、痴呆症状の比較的落ち着いている人、5人以下の集団ということにしたい。バスなどを利用するのは、冬でもよい。
- 動機付け等の意味で施設の備品を整備することもできる。その場合は、中村委員まで連絡する。

(5) 第3回 外出支援委員会議事録

1) 南陽園実践報告

外出希望を取り、おすし、パチンコ、家などが意見として挙がったが、今回はすし屋とした。歩行の安定している人の中でおすしの食べられる人を対象とした。しかし、行くことに決まっていたすし屋が人手不足ということで断られた。もうひとつのすし屋を探したが、後日また断られた。参加予定者の家族への電話連絡を行った。すし屋が取れないということで、一駅先のすし屋にしようと思ったが、今回は遠出をしないこととした。結局フォルクスに行くことになった。和風のものがあり、ソファもあり落ち着いた雰囲気があったので。10月7日、外出予定者の前日の状態観察。当日一人調子が悪く、その人とその人と仲良しのかたは行かないこととした。11:45 発、13:45 帰園。夜勤に引き継いだ。

反省としては、フロアの誕生会がありそれを押していったことにより、誕生会がお粗末になった。他のフロアの人に手伝ってもらっていた。利用者は楽しんでいる様子が見られた。これからは、人手等勘案しながら実施したい。急に対象者がかわり、家族の理解が不十分だった。事前準備が不十分だったことは反省したい。食事の形態からチェックして行けばよかった。今も行ったことを覚えている人もいた。その点ではよいことができたのかなと思う。

→第一回ということでさまざまな課題が出てきている。可能な限り今後も続けるという方針で行う。その場合の契約の仕方、ルール作りの仕方について検討が必要。これが今後の取り組むところの参考データになる。

< 質疑応答 >

・お金の支払いの件で利用者に戸惑いはなかったか？

行くときに持ってないのということはある。今回は、「私のおごりよ」と伝えた。食べているときは利用者さんからの問いかけはなかった。何度か説明しているうちにお金の心配は出ないようになっていた。

・すし屋の予約がキャンセルされたいというのはどのような経緯だったのか？

→一軒目は「忙しくて本当に申し訳ないんだけどということで断られた。」

二軒目は、はじめは受け入れられて安心していたが、二回目に確認の電話を入れたらうちはそんなサービスは行っていませんという返事を受けた。この前は了承得たのですがと問い返してもだめだった。カウンターでわいわい食事できないということもあり、今回は見合わせた。

・計画を立てたが突発的なことで計画が狂ったことがあった。突発的なときには、思い切って辞めるということも必要だったかなと思った。

・洋服がないからということで外出されなかったのは、外出することを意識でき始められたということと考えられるのでいいことだったと思う。そのときにどのように誘えるかということも考えられたら。

2) 第二南陽園

9月24日に班長に説明。9月27日に候補者・行き先を決める。7名の候補者が挙がった。反応がわかりやすいと思われる方。趣味が多い方。家族の了解が得やすいと思われる方。から3名の候補者が挙がった。

実際はその3人のうちの1人が外出した。熱等あったため。家族からぜひ連れて行ってほしいという回答があった。研究ということについても了承をいただいた。

近隣アセスメント、持ち物着替えなどの準備をした。車椅子を持っていくかどうかということがあったが、普段から歩く方で大丈夫だろうという感じがあったので、何かあった場合にはタクシーということで出かけた。

反省会を設ける時間がなかったが、衣類に関して手袋が必要であったと思った。家族に衣装を持ってきてもらったが、でかでかと靴に名前が書いてある靴だったので、はかなかった。説明しておけば。外出の記録をフロアに記録を回すと、こんなことが日常的にできるようになればねとのことだった。利用者何名かで出かけて、利用者同士の関係も見られればよかった。

・西友前の歩道でバランスを崩したときは手はつないでいたのか？

手をつないでいた。声をかけたが、ぐらっときてしまった。その後2回目以降は無難に移動できた。

<質疑・意見交換>

→まずはとにかく安全第一で、このように一人でもいいと思う。これでよかったのでは。

3) 第三南陽園

20分ぐらい使ってゆっくりゆっくり神田川などを見ながらお蕎麦屋さんと花屋に行った。

出かけるということは事故が起こりえるというリスクがあるということでもある。反面、家族はいつも座っているよりは出かけたほうがいいとのことだった。また、外を連れ立って歩くのはこんなに責任感のいるものなんだということも思った。外出中での反省としては、一人の利用者が、あたしの靴じゃないということに気がされたのが失敗したなと思うことだった。上着は自分の名前を確認して来ていた。その方は、到着してもなんで目的地に到着してもなぜここにいるのだろうという感じだったと思う。

利用者が注文した食事は高いものではなかった。いろいろ食べるように勧めたが、お金のことを気にしているようだった。頼んだ料理は、施設で召し上がる食事の量の倍はあったが食べられた。麺が苦手な方がいたが、ご家族が麺きりを持ってこられており、対応できた。残してしまっただけで心残りがあったようで気にされていた方がいたので配慮が必要だった。トイレが和式で狭く、トイレが近いので入店してすぐと、外に出るときに2回用を足される方もいた。

帰りに花屋で花を購入されたが、帰園後、確認すると「めずらしい花があるわね」と自分で買ってきたのは忘れられていた。

外出先を決めるにあたって、最寄り駅の線路の向こう側を考えていたが、往来が激しく、裏道でも鉄橋などもあり車椅子でも渡るのは危ないという判断であきらめた。

対象は、ADLと痴呆の程度で考えた。会話でき理解がある程度できる人、また土地勘のある人を選んだ。外出中に「〇〇(利用者のゆかりの地)の近くなんですよ」など水を向けたりした。

蕎麦屋の中でも、普段園での生活の中では、水がほしい場合、いつも自分で「お茶ください」と、自らとりにくる方が、このときは、水をお持ちしましょうかという「いいのよ、店員さんがいるから」ということで普段と違う役割が取れていた。

外出中は、利用者の安全第一を考えると怖かった。普段施設で歩いているのとは違った。

<質疑応答・意見交換>

→花を買ってきたことを忘れたということだが、利用者にとって花屋に行った体験は残ると思うので、無意味ではないだろう。気をつけないといけないのは、今後回を重ねるごとに生じるスタッフの慣れの意識だろう。何度も行くことで「あのあたりはよろめきやすい」「室内でこのくらい歩ける人は外ではこのくらい歩ける」ということもわかるようになると思う。また、利用者も歩いているうちに、歩きにくい道路でも対応出来る様になるかもしれない。第二南陽園の結果にもあったが、利用者にワーカーを気遣う台詞があったり、シチュエーションがわかって違う役割取れたりする、やってもらってよかったと思う。

4) グループホームひまわり

前回の委員会から今回の委員会までの間に 2 回外出した。今後、人を決めて外出支援をしたいという矢先の外出支援だったので、家族も納得されている。外出者を決定した経緯は、利用者にアンケートをとり、全員にやるということで実施している。外出しておすしを食べるというコースを取った。外出した利用者の担当スタッフが外出に付き添った。事前にトイレの設備や段差の有無は電話で問い合わせていた。食事も普段より多めだったが完食された。事前の準備としては薬、紙パンツパットを持っていった。園外に出ることはあまりなかったので、外出するぞとわざと前向きに盛り上げた。お土産にみかん買うということで計画があがった。ミスタードーナツに帰りによった。普段よりかなり食べたとのこと。勤務調整は、ホーム長に会議がない日、人手が多い日ということで決めた。お昼少し前ぐらいに出発。12:30 より遅番増えるので人手に余裕ができる。

12 時に出発し、ファミリーレストランで食事を摂った。対象となった利用者は、脚力もあるのであえて遠回りをした。ちょっとしたことですごく気になる不穏になる方なので、遠回りでも静かな道を通った。付き添いで松野委員もきた。松野委員は、普段関わらない人であるので早めにきてコミュニケーションをとってもらった。

利用者は出かけるときにお金の出所を気にしていた。説明する際、職員間で食い違っていることもあり、少しのことで不穏になる人がいた。「私はどこに連れて行かれるのという感じだったので」あえて前に立って急いで先導した。ついてきてよという態度をとった事もよかったと思っている。

下見は特にしていない。この日は、おいしいものを見たら目の色が変わって、いつもより食

べる量が多かった。最初はコーヒーを飲みに行こうということだったが、コーヒーは飲まれなかった。スーパーで買い物をして、ある利用者が「こっちのバターよりこっちのバターがいいわ」等の言葉が出たことが職員にとって新鮮だった。売店に出るのが日課という方だが、スーパーでもよかった。お金の感覚もあるようで、お金の管理も任せるようなケアもできたらという話も出た。

家族への事後報告は、家族への連絡帳に記載した。残りの職員(施設に残る職員)の動きについては特に普段と変わりなくできた。また、利用者が今入っている保険をどんなものなのかと見直したりした。個人的に気になったのは、駅前の自転車がなくて外出しにくかった。利用者と手をつないでいくと通りにくかった。

外出に当たって、対象となった利用者は、何で私たち2人だけなのと他の利用者のことを気にしていた。特別扱いはいやであり、忘れることはあってもお金のことについても伝えたほうが安心されるのかなと思った。外出に当たっては、狭い範囲から徐々になじみのある範囲を広げていければいいのではないかと、連続性のある空間の広げ方がいいのかも知れない。対象となった利用者は、出かけるときに自然に自分の財布、袋を持っておられた。そのことによって自分で出かけているという感覚が持てるのではないかなと思った。

お金については、払う動作をやってもらうと自然に日常的な流れになるのではいか。食べてしまっ出て出る時になると二人ともお金が気になっているようだった。

(6) 第4回 外出支援委員会 議事録

1) 今後の委員会活動についての確認

成果物としてマニュアルの素案を作る。ボランティア養成カリキュラムの素案(こういう内容こういう科目、何日間で外出支援に使えるボランティアさんを教育する)という2つを成果として出したい。

残り2ヶ月で最低1回か2回が各施設外出していただきたい。今後は今までどういうスタイルでの外出が行なわれてきたかということについて、まとめる予定である。マニュアルとしてどういう柱が必要かということについても合わせて検討する。今度のマニュアルで盛り込むところをどうするかということについて話し合いたい。どれかに限定してマニュアルを作ってみるといいのかもしれない。近場に行くという限定をかけてでもよい。もしくは網羅的に試してみるといいことをやってもいいと思う。

2) マニュアルについて

中身について、考えられることとして、どのような体制で外出を支援していったか、実行上の留意点、(実際外出する上でどのような注意点がいったか)、職員の準備(準備にどのくらいの時間をかけたか等)などが考えられる。

マニュアルの作成の中身としていろんなタイプごとの外出が考えられる。タイプごとの外出を

考えていくとき、どういう点に絞った外出にしたらいいかということについて話し合っていたきたい。「職員の協力体制」について、これをこんな風に乗越えてやれるようになったというプロセスについても盛り込んで行きたい。

まとめるときには、ADL に焦点を当てて整理をしてもよい。

3) その他の議論

施設で職員の個人の車を使うときどんな問題があるか？

→保険はどうなっているかといわれた。施設の車はある。それで送迎することある。

マニュアルにタクシーについて押さえても、タクシーなんて高くて使えないとなってしまう。

保険がやっぱり運転していた場合事故を起こしてどうなるか。2 種を持っている必要があるのか→それはない。いろいろな保険の種類がある。

外出する高齢者が目的を十分理解できていないことがあるので移動する場合は、乗っている時間が影響する。45 分ぐらいが限界だと思われる。よほど一対一でしゃべっていないといけない。週 1 回行ってもよさそうな目的地のイメージが必要である。

可能性としては、毎週日曜日に行きたい人を募ってそのときに「外出したい」という意見の確認できた人を連れて行くという方法も可能であると考えられる。

大前提は痴呆の人だが、本当は痴呆の人でなくても連れて行くことが必要であり、例えばバスが一便出るよということで、南陽園の人、第二南陽園の人、グループホームひまわりの人といったようにいける人を募って定期的に出かけられるようになるといい。

(7) 第5回 外出支援委員会 議事録

高齢者が外出するに当たっては、さまざまな問題点がある。法人ゆえの問題点もあると思うが、日本全国共通するような問題点も多々あると思う。そのような問題点の洗い出しと、それらの可能な限りのアイデア工夫、工夫ですまないところについては、こういうような条件整備が必要だよという解決策を考えるということの後一ヶ月やってほしい。

1) グループホームひまわり

10 月 23 日に外出した。9 月に諸準備について考えた。9 月から 10 月にかけてスタッフに内容を検討してもらった。居室担当者と計画書を作成。10 月 20 日に家族へ連絡 22 日、引率する職員に注意してほしいことについて係りに説明。清委員は勤務外。引率者は勤務中。吉祥寺まで行って昼食とって、井の頭公園を散歩しようというのが計画。スタッフが「なに食べたいですか」と訊くと「なんでもいい」といわれた。焼肉の希望が見られ、焼肉を食べにいくという計画で出かけた。途中駅までの道の中に花があつてきれいだな。ベランダで花を育てていたのよ。と昔の話をされる。

食事では、普段食べられない 5000 円のフィレステーキを食べた。ひとりの方は義歯だったが、やわらかくて感動していたという報告を受けている。その後 LOFT で買い物をした。井の

頭公園にいき、スワンボートに乗りませんか？というNさん「嫌よ」と言ったが無理に乗ってもらったら楽しんでた。「外人さんに手を振っちゃったー」といったりしていた。帰りに落ち葉を拾いながら帰ってきた。その後も利用者の一人は、「これとって来たのよねー」といって記憶していた。帰りの電車で、「またつれてきてね」といわれた。Kさんのほうに後で腰の痛みが見られた。園内の散歩でも疲れたといわれる方である。

ホームに残っていた日勤者も普段と変わらないということだった。おやつのときなどにさみしい雰囲気だったとのこと。ホームにいる利用者より「NさんやKさんはいないの？」との質問があった。その他、外出支援中の様子を日誌に記録して家族に報告した。

もう一人外出支援を行った方は、精神的な問題が疑われるところもある、トイレが頻回な人であった。集中しているときはそうでもないが、夜間帯で二十数回行くような人。職員も心配していたが、外出中はトイレ1回で失禁がなかった。10:20 帰宅後、買ってきたお菓子を食べ、購入してきたあめをみんなに「どうぞどうぞ」と配っていた。外出のことについておやつのときに聞くと「それを聞いたらかわいそうだよ」といって何も言わなかった。普段と同じかなという感じ。残っていた職員は特に変わりなかった。いつも一人にいる人なのでYさんがいないことについては利用者も何もなかった。夜間状況は、尿を抑える薬を飲んでいても20回行く様な人だけど、このときは1時間以上トイレに座り「なかなか小便が出ないんだよ」という以外は特変なかった。また、普段から3食食べる人でなく時間を空けて少しずつ食べるような人である。運転手であったことから、期待したがタクシーには余り興味なく残念だった。翌日Yさんのお嫁さんが来てビデオと一緒に見たところ、宝くじを購入する場面を見るとうれしそうに繰り返し見ていた。お嫁さんに買ってきたお土産を渡したところ、この袋は何だろうと自分で開けていた。家族との連絡ノートに、「外出どうもありがとうございました。ビデオ見せていただきました。ピザなど私たちが父のイメージから考えられないお店を選んでいただき驚いています。年末で人も多く店や道路歩くのは大変だったと思います。食欲もすごいし帰りも良く歩いていましたね。びっくりです。久しぶりの繁華街、楽しかったようです。昨日のことはすっかり忘れていましたが、宝くじを買っている場面を見るとうれしそうでした。かなり健脚なんですね。駅の階段も克服してすごかったです。もっと気がるに外出に誘ってもいいのかなと思いました。」との記述があった。

< 質問・感想・意見 >

・家族の連絡帳記入とあるが、家族が来園されたとき見るのか、そこに書いてあることを誰かが連絡するのか？

→家族から要望があり、家族から要望があって大事なことはノートに書いていきたい。家族が様子とか理容・美容の支払いとか、贈り物がきたりとかの連絡に使っている。家族の方がきたら必ずそれも見てもらう。

→家族へのフィードバックをすることの意味、重み、効果にすごく役に立つようだ。あらかじめいろいろ話を聞いたりする、事前情報を得たりする意味でも生活暦の読み直し、そのことを通じて話がまたできるということについても良かった。

→Yさんのお嫁さんは週に3日4日いらつしやる。食事もたまに作ってもらえる。昔の話を聴きだせる環境ではあった。「あんなに歩けるのならどんどん歩かせます。」と張り切っていた。ビデオについては、家族と見たときにはビデオに興味があったが、みんなで見たときには皆さんそんなに興味はない様子だった。また、宝くじについては、「1億円当たったらみんなで旅行に行こうね。」等の話を頻繁にしている。

移動手段について、途中で変更したのは大事な点だと思う。スタッフが興味がなさそうと判断したら、無理強いを辞めるという柔軟性は大事。無理やりタクシーにこだわらなかったのはその人のニーズや気持ちをちゃんとみているということだろう。その人に応じた対応の為の機会となった。生活暦を重視しながら、こういうところがいいんじゃないか、でもうまいかなかったらやめるの両方で進められると良い。はじめからなかったらいいという問題ではなく、調べてあったというのも大事。

すごく職員教育、職員が実力を伸ばしていくのに役立つ。また家族支援にもなっている。家族というのは施設に預けて後ろめたさとか少なからずある職員が多い。預けた先でいい援助してもらっている楽しそうに暮らしているという姿見るというのはそれだけで心理的な負担が減る。家族支援しましょうというけど、具体的な方策のひとつとして考えられる。

・また、外出については、試してみるけどもだめだったときにどうしようかということは考えておいても良いだろう。シュミレーションが頭の中でもできてれば職員としても動きやすい。

・ボートに乗ったときなど、利用者とのかかわりについても、人間関係だから言われたことは全部聞くかというそういう場面ばかりでなくても良いだろう。「今日はこのために来たんだからいこうよ」とある程度押しでも良いだろう。ただここであんまり突っ張ると相当に気分悪くするなど感じるかどうかは職員のセンス・専門性といえるかもしてない。おそらくそういうのは場数踏んでいくと結果の予測を間違えないようになっていくのかなと思う。

2) 南陽園

11月19日 午後1:00～3:00

商店街付近を散策。利用者は、82歳。職員はケアワーカー2名。外出時の配慮→前回は時間をオーバーしてしまったので時間通りに戻るとのことと、歩道を歩く等安全に配慮することで行った。予定より20分遅れて出発した。感想→周りの景色文字とか看板が多いということとそういうのを見たり、子供を見ると何か発語が出てくるという状況だった。外出した利用者は自発的にはなかなか話さない人で、こちらからの声かけには反応される方であるが、子どもを見た時には自発的な発語が見られた。そのようなことからこういった機会はよかったと考える。前回は強行突破で外出してしまってフロアに多大な迷惑をかけたが、今回は職員2人で特に変わりはない。記録には「突然の受診者もなく、よかった」と書いてあるが受診者があつたら変わっちゃうのかなとも読める。ある程度余裕を持っていかないといけないということだろう。それから終始話をされていた。このことを帰って職員に報告したら、外出支援というような特別なことではなく日常的にいけたらとのことだった。その際にはやはり、職員だけでは

なくボランティアの導入を考えていく。ボランティアも一人だけではなく、居残りの方でも良いのでは？とのことでした。人手があればできるということらしいですが、そこが一番のネックかと思えます。

<質問・感想・意見>

前は突発的にいろいろあつてばたばたして中止にするか行くかという状態で、残っている職員が大変だった。その辺がボランティア等いると良いだろう。

3) 第二南陽園

11月13日、12月10日

12月10日の分から報告。午前中 H さんデパートに行った。目的はフロアに飾るクリスマス用品の購入であった。もともとゲーム大会の日だが、好きな人ではないのでその間に外出しようということで、付き添いは班長ワーカー1名相談員1名で行った。手段は第二南陽園の車で行った。実際に行ってみるとほしいものがなかったのでロフトに変更した。反省点として下見をするということがあがっている。買い物のあとお菓子やさんに行ってお菓子を食べている。少し疲れが見えたので休憩を取ることは必要であるということと、車の中で休憩できることとお茶などの準備が必要という意見が出ている。この方はあまり普段感情が表に出にくい方だから、良く覚えてらっしゃるようであった。

11月13日のほうについては、11:00~14:00、4名の利用者で。晴れたら深大寺で、雨が降ったらドライブして帰ってこようという計画で行った。昼ごはんとして深大寺の会席を食べた。付き添いは、班長、ワーカー3名、相談員ワーカーのうち1名であった。移動手段としてはデイスサービスのバスを用いた。バス会社の運転手さんが協力してくれた。今回は車での移動ということと昼ごはんを食べるということで時間を優先に考えてしまっているのがあまりゆとりがなかった。会席料理自体はよかったようだが、1品ずつ出てくる間に、食べたことを忘れてたり、集中力が切れるということがあった。1時間半食事をするのはつらいという意見があった。懐石料理であっても初めから全部のメニュー出てきたほうがいい。人数に関しては、マンツーマンでつけるほうがいい。利用者の様子を観察すると、懐石を食べたことよりも、車に乗った、外出したという感激が強かった様子であった。ゲーム大会で職員数が厚くなって余裕があったが、ゲーム大会は事情でやめ、外出したいということがゲーム係から出た。ワーカーの感想としては、車で行けば行動に自由が利き、遠くまで行けるから良いという意見が出た。しかし、逆に時間に縛られ、交通状況によっては帰りの時間も決まっているので時間設定を考えないといけなという側面もある。

また、外出支援の委員が仕切るのではなく、それ以外のワーカーの意識として、「俺だったらここに連れて行きたい」等の意見が出され、行事係、ユニットケアの係りが自主的に協力して、動いて、記録も作れるようになっている。相談するのも係りだけで背負い込むというのではなく、ミーティングのときにほかの職員がいる中で話すというようなことができるようになった。こういう状況を受けて、外出支援の研究の企画以外で、利用者を外に連れて行きたいという職

員がいて、自主的にマンツーマンで付近の花屋やコンビニ、ミスドに行ったという報告がある。それについては業務時間に行ったというのではなくて、公休のときにほかの行事のボランティアに来て時間が空いたので連れて行ったという経緯であった。職員の好みの店であるが、洋服を売っている店があり、そこを一緒にみたりしている。利用者のためと言うよりも、職員と利用者で出かけてきましたというような感じだが自主的に外出支援を実践したいと考えるスタッフも出てきている。今後はさらに、利用者の希望を考えて外出を考えて行きたい。ワーカーも特定のワーカーが付き添うのではなく、誰でも企画を立てて連れて行くような感じにしたいというのがフロアの意見であった。

<質問・意見・感想>

- ほかの職員も行きたいといっているというのは良い。
- GH では、外出時も携帯を用意するようにしている。ここにも携帯についての記録がある。今後は、個人の携帯はどうなのかなと感じた。
- 以前はよく公休のとき外に連れて行くというようなことはあったのか？。
→なかった。
- 刺激にはなっているんでしょうね
→フロアがそういう雰囲気になっている。
- 利用者は、会席のとき注意集中力が足りなくなるかもしれないということは、想像できるので、特別バージョンがよかった。これは普遍的に言えることだろう。専門的な力としては状況に応じて対応したほうがいいというのがあるが、ひとつのポイントとして、長続きしないかもしれないと考えるのも必要である。
- 懐石について利用者の特徴が見えてよかったと考えられる。懐石にしてものんびりしていつている人もいればそれじゃもたない人がいることがこういうことをやることによってわかってくる。マニュアルを作るにしても、こういうことはやめましょうとか、必ずいっぺんに出してもらいましょうという風にする必要はない。こんな人だということが何回もやるうちに見えてきて外出もしやすくなるというのが本当なんだろうなというのが見えてきた。
- こういうことをしたことが一人一人のケアプランや対応の中にどう反映されるかということだと思う。特に第二南陽園はどっちかというと出れる人というのが多い。グループホームひまわりのように全員に試すというのはある。両方も行事で済ませないで日常生活でのケアのポイントとか、思い切ってケアプランレベルまで外出することで生活の張りを取り戻す等の落とし込みも必要ではないか。

4) 第三南陽園

感染症の影響で外出ができなかったため、計画の報告を行う。今回はクリスマス用品を買いに行こうということで計画した。Sさん77歳男性。血圧などを測りながら、もうすぐクリスマスです

ねというキリスト教徒ということがわかった。歩行のふらつきは若干ある。Kさん92歳女性、難聴がある。ほかの方とのコミュニケーションできていない。耳元で話すと理解力はある。Aさん帰宅願望が強いということもあってよく外に出たがる人。以上3名

行き先をクリスマスの飾りつけ、ケーキ等を買うためにオリンピックを選ぶ。

外出支援が始まって居室担当が居室担当らしいことを始めた。居室担当は入浴の着替えの担当見たいな感じだったのが、本人が行きたいところや行ったら喜びそうなどところを見つけなきゃという意識から、ケアプランを立てる為に自分がどうやって介護しているかという一人一人の実践の振り返りがやっと始まった。

<質問・感想・意見>

外出支援を実践していく上で、最低条件になることは、事故やリスクが生じたときに「なんでそんなことしたんだ」というように個人の責任のみを問われるという流れでは実践できない。組織として外出の責任を引き受けるというシステムがある程度保障されないととてもできない。だから、法人の責任であるということが明確になっていくような方向性や外出する目的が大切になる。これはなんのためにやるのかという目的や意義がやっぱり明確にされてて、ある程度考えられるリスクも整理されてたという書類的な準備は一方で法人に責任を取ってもらうときには必要である。計画書だけではなくて日常生活の記録の中で外出可能性みたいなことについて書いてある欄が書いてあって調べた上で外出支援を実践できると良い。

2. 外出支援試行の内容

委員会を運営すると同時に、表 2-1のような内容の外出を行った。

外出支援の回数は14回で、述べ52人の利用者が外出した。

表 2-1

	南陽園	第二南陽園	第三南陽園	グループホームひまわり
9月			9月22日 13:30-14:00 西友・喫茶店 (事前調査)	
10月	10月8日 12:00-14:00 フォルクス	10月16日 13:30-15:00 商店街	10月20日 そばや、花屋	10月2日 11:45-15:30 昼食・買い物

	10月15日 11:45-14:30 フォルクス			10月10日 10:00- 高井戸周辺で買い物
				10月23日 11:00-14:00 昼食・公園散策
11月	11月19日 13:00-15:00 商店街の散策	11月13日 11:00-14:00 深大寺	中止	
12月	中止	12月10日 9:30-13:30 ユザワヤ	12月18日 オリンピック (中止)	12月18日 10:30-14:20 昼食・宝くじ購入
1月	中止		中止	1月26日 ドライブ・昼食
2月			2月15日 10:00-14:30 初詣・寿司	

3. 具体的な試行の内容

外出支援の実践について、具体的な試行の内容をが介護職員が外出支援の実践を行うごとに記録した。ここからは、その具体的な内容の一部を提示することとする。

(1) 第三南陽園

1) 富士見ヶ丘商店街の事前調査 H15. 9. 22. 13:30～14:00

① 参加職員

佐々木(ケアワーカー5F)・・・公休日

山本(相談員)・・・昼休み+勤務時間

酒井(看護師)・・・昼休み+勤務時間

② 外出先と目的

目的: コーヒー豆が切れたので、買いに行く事→富士見ヶ丘スーパーへ
おやつを買いに行く事 → ミノン(喫茶店)へ

③ 手順1 外出先までの道順・道のり・時間などを調べる。

<方法>

・ホームから実際に歩いて、所要時間を計る。(時間帯を実際の外出時間へ設定。車

椅子を押しながら、利用者の歩行速度を考慮し、所要時間を計る。）

・ビデオカメラ・デジタルカメラを用いて、歩道の状況を確認する。（危険な場所、段差や傾斜、道幅などはどうか？）

④ 手順 2 外出する利用者の選択をする。

＜選択方法＞

・痴呆の状態、理解度で選択。

・ADL状況で選択。（自力歩行安定又は車椅子全介助）

・富士見ヶ丘付近に土地勘があるかで選択。

⑤ 下見結果

＜問題点＞

・正門の傾斜が急で、おうとつがある。

・正門前の歩道は、車椅子がやっと通れる幅。

・商店街は車の通りが多く、歩道がない。商店街を避ける裏道にも歩道がない。

・SEIYUまでは、歩いて25～30分かかかる。

・京王井の頭線を越える陸橋は、傾斜が急。

⑥ まとめ

道のり、時間、道路状況を考えるとSEIYUとミノンは、無理であると判断した

2) 富士見ヶ丘・おそば春木屋で外食、花屋で観葉植物を買う～

① 外出支援実施内容

日時：平成15年10月20日(月)

場所：春木屋、花屋

② 参加利用者 A氏、Y氏、T氏

参加ボランティア：T氏家族1名

参加職員：佐々木委員(ケアワーカー5F)

山本委員(相談員)・・・昼休み＋勤務時間

酒井委員(看護師)・・・昼休み＋勤務時間

町田(5Fケアワーカー班長)

中村委員(センター)

③ 準備

・10日程前・・・春木屋へメニューをいただきに行きながら、今回の目的を説明。承諾を得る。(人数、時間、日時など)

・1週間前・・・参加する予定の利用者と共に、談笑しながらメニューを見る。

・参加予定の利用者のご家族に、事前説明と了解をいただき、またボランティアとしての参加を呼びかける。(説明内容:外出支援の目的と内容、記録の許可、費用負担について、リスクの説明・理解)

・前日・・・必要物品の準備

(車椅子*疲労や、アクシデントに備えて。紙パンツ、パット、おしぼりタオル、ハンカチ、携帯電話、体温計、血圧計、メモ帳、デジタルカメラ、ビデオカメラ...etc)

3) 初詣(大宮八幡宮)・びっくり寿司で食事～

① 外出支援実施内容

日時: 平成16年2月15日(日)

場所: 大宮八幡宮・びっくり寿司

② 参加利用者: 5F利用者17名

参加ボランティア: 家族22名、学生ボランティア 3名

南陽園より安田(ケアワーカー)1名

参加職員: 島崎園長、橋谷副園長、田近医務室長佐々木(ケアワーカー5F)日勤
安田(ケアワーカー5F)、山本(相談員)日直(待機)、石井(ケアワーカー5F)酒井
(看護師)公休、松村(ケアワーカー5F)遅番、町田(ケアワーカー5F班長)・・・日勤
(待機)中村委員(センター)

③ 準備

1月中旬・・・外出支援参加の同意書を家族へ送信。

1月下旬～2月始め・・・参加希望利用者25名の健康状態をチェック。

風邪や、状態不良者は中止を決定。(6名を不参加とし、家族に連絡する。)

2月13・14日・・・参加利用者の最終選考。(2名を中止へ。)

最終的な参加の有無を家族へ確認する。

医務応急セット点検

車酔いをする利用者にはトラベルミンを準備。

時間	内容 出来事・発言など
BP測定	職)「これから初詣に行きますよ。」 N氏「連れて行ってもらえるんですか?!うれしいわあ。」と、泣き顔で答える。 K氏へ、ご家族とは現地で会えることを伝えると、発語はないが(失語症あり)涙を浮かべて喜ぶ。 Y氏に酔い止めの薬を与薬する。(前もってご家族より服用の希望あり。) すると、H氏のご家族もH氏に与薬の希望あり。H氏にも与

	薬する。
1階のバスまで移動	ご家族着席後、利用者を誘導する。 N 氏御家族が5F に忘れ物を取りに戻り、やや点呼が遅れる。
バスの中で	Y 氏、K 氏、A 氏、N 氏とも黙って窓の外を一生懸命に見ている。 歌を歌いながら、15分ほどで大宮八幡宮へ到着する。
到着	ご家族に先に降車していただき、そのご家族の元へ職員とボランティアで利用者を誘導する。 この時大型バスにて、ご家族の降車の後すぐに、ほとんどの職員とボランティアも下りてしまった。 その為、残された利用者がご家族の後を追って椅子から立ち上がり、バス内の職員1～2人での不安な見守りになった。 F 氏「ここは誰が祭られているの？」 職)「う～ん。実は、私も知らないのです。後で、調べてみましょう。」
門にて記念写真	門には階段とスロープがあり、それぞれのご家族が利用者と共に門を通る。ご家族が不参加の利用者には職員が付き添う。 Y 氏にはご家族の付き添いがあった。しかし、1人でどんどん歩いてしまう Y 氏に、ご家族があまり気にしていない様子みられた。 それを見て、職員が慌てて Y 氏に付き添い階段を下りる場面があった。
参拝	リクライニング車椅子の H 氏も、職員が車椅子ごと持ち上げて階段を上り、ご家族と一緒に参拝する。 職)「H さん。何をお願いしたんですか？」 H 氏「..みんな...の事。」 H 氏ご家族「あらっ。」 職)「そうですかぁ。ご家族みんなの事を思っているんですね。H さん優しいですね。」 H 氏とご家族に笑顔がみられた。
バスへ移動	バスまでに石畳があり、車椅子介助者も歩行者付き添いも、いっそう注意を払った。
びっくり寿司にて	H 氏「私お寿司なんて食べられないっ。」 H 氏ご家族「おばあちゃん、別のものにする？」

	<p>職)「あら、ここのお寿司は美味しいそうですよ。それに、もし食べられないようなら後で別のものも頼めますから。」</p> <p>H氏「じゃあ、食べるわ。」</p> <p>もともとお寿司が食べられないという Y 氏には、メニューから好きな物を選んでもらう事にした。メニューをしばらく見ても、なかなか決められないでいる Y 氏。</p> <p>Y 氏ご家族「天ぷらもあるじゃない。あと、ご飯とお味噌汁があればいいわよねえ？」</p> <p>職)「かき揚げもありますね。」</p> <p>Y 氏ご家族「あらっ、かき揚げ好きよねえ？美味しそうじゃない。それにしょうか？」</p> <p>結局 Y 氏は、何となくかき揚げに決めた。</p> <p>お寿司が食べられないと言っていた H 氏は、お寿司が出されると、10分程にて全部を食べてしまう。</p> <p>そして、目の前の Y 氏のかき揚げをも食べようとする。</p> <p>それを見た H 氏のご家族が、「あら、嫌だあ。それは Y さんのでしょう？もう、いつもこうなのかしら？こんなに食べるなんて知らなかったわっ！」と驚いていた。</p> <p>K 氏は、嚥下障害のため普段はミキサー食であったが、今回はご家族と同じテーブルで、あえて同じお寿司を食べていただいた。</p> <p>例え沢山は食べられなくても、‘寿司屋で寿司を食べる’という、その雰囲気を感じてみたいという考えからだった。</p> <p>しかし、時々むせこみはしたものの K 氏は、手で寿司を掴み、しっかりと咀嚼して食べていた。</p>
店内のトイレにて	トイレはドアが開閉式で狭く、F 氏は手を挟んでしまった。
帰りのバスへの移動	<p>お寿司を食べてデザートが出てくるころには、利用者に疲れが見えてきた。</p> <p>H 氏は、テーブルに顔を伏せて眠い様子だった。</p> <p>F 氏は、背もたれのない座敷で座る事に疲れている様子で、ご家族に寄りかかっていた。</p>
帰りのバスにて	疲れたのか、車内でウトウトするご家族もあったが、利用者は起きて、窓の外を見ていた。
来園	来園後に体温チェックを行う。5名が37度台の微熱が出たが、活気はあり、その後の水分補給にて解熱みられた。

	H 氏に、お寿司の味が美味しかったかどうかをたずねると、美味しかった と返事あり。
*反省点……1)バスの乗り降りについて、ご家族を先に誘導したところへ利用者を誘導したが、ご家族を探して利用者がかえって落ち着かないところもあった。	
2)びっくり寿司にて、テーブルによっては利用者のご家族のみとなったところもあった。ご家族同士でくつろいだ場面をもてる一方で、職員が目が届きにくく、食事介助(誤嚥など)に不安があった。	
3)びっくり寿司にては、2時間以上の時間がかかってしまい、途中にて利用者が疲れている様子が目立った。	
4)ボランティアについて、もっと利用者と積極的に関わってもらいたいと思う場面があった。プライバシーを害さない程度の利用者の情報や、注意事項など、事前に話し合う機会がもてればよかった。	

そば屋にて①	職)「何でも好きなものを頼んで下さい。」
	A氏)「でも私、お金持ってきてないから……。」
	職)「大丈夫。あの人のおごりだから。」冗談交えて、中村さん、山本相談員を指差す。
	職)「何がいいですか？おそばも、うどんもありますよ。」
	A氏)「私は、何にも入っていないものもいいです。」
	Y氏)「私、きつねそば。」
	A氏は、メニューを見てもなかなか決められない様子。(10分程経過)
	職)「ここはおそば屋さんですから、おそばがおいしいですよ。」
	A氏)「私は、何にも入っていないものもいいです。」
	職)「では、きつねそばはどうですか？」
	A氏)「じゃあ、それにしてみましよう。」
食事中	A氏もY氏も、黙々と食べる。
	職)「味はどうですか？」
	A氏)「おいしいですよ。」
	と、Y氏の水が無くなりかけたために、職員が声を掛ける。
	職)「お水お持ちしましょうか？」
	Y氏)「……いいのよ！持ってきてくれるからっ！」
	Y氏は、普段は自ら湯飲みを持ち、お茶を貰いに何度もパントリーに来る方だった。しかし、この日は‘客’という違う態度をとっており、

食後 花屋 にて	<p>驚かされた。</p> <p>T氏、Y氏がトイレに行くも、和式であったため困難だった。</p> <p>A氏の手を引き、そば屋を出る。</p> <p>職)「Aさん、お花を見て行きましょう！」</p> <p>A氏)「あらあ。きれいですね。」</p> <p>再び店頭の花に興味を示し、つないでいた手を外し、グルグルとみてまわる。</p> <p>職員が、おおきなカボチャを試しに持ってみるよう勧めてみる。</p> <p>すると、恥ずかしがって突然に走り出し、道路の舗装の悪い所にて倒れそうになる。近くにいた職員が間一髪支え、転倒は避けられ、けがはまぬがれる。</p> <p>その後もA氏は、いろいろな花を何度も何度見ていたため、</p> <p>職)「気に入ったお花があったら、買って帰りましょう。」と声を掛けるも、なかなか決められない様子。それでも、気になる花の前は、何度も行き来していた。</p> <p>T氏とY氏は、気に入った花を次々と選んでいた。</p>
帰り 道	<p>帰り道は、疲労も有るように見えたが、ホームまで自力で歩いて帰った。(ただし、行きよりも歩行はゆっくり。)さすがに、3人とも疲れたのか、ホーム手前のベンチに声かけなく座り出した。</p>

反省点

- ①A氏の外出靴を事前に準備していなかった。
- ②トイレの下見をしていなかった。

(2) グループホームひまわり

1) Iさん Oさん外出支援報告(10月2日実施) 高井戸駅周辺で昼食と買い物

9月中	<p>勤務表作成の際外出できるよう配慮。</p> <p>当日誰が外出できるか検討。</p> <p>当日出勤職員の調整を行った。具体的には職員契約社員の出勤や外出支援担当の職員が出勤できるよう調節。</p>	
9月中	<p>全利用者にどこへ外出したいかアンケートを取る。</p>	一部勤務外もあるがほぼ勤務中
9月中	<p>外出支援内容検討</p>	勤務中
9月31日	<p>研修センターに外出計画を提出</p>	勤務外
10月1日	<p>外出支援計画書・報告書の作成</p>	勤務中
前日	<p>Oさん家族に外出の連絡</p>	勤務中
実施	<p>外出をすることを伝え、外出の準備、トイレ誘導を見守り介助する。</p>	

	<p>二人とも笑顔外出することが嬉しそうな様子あり。</p> <p>〇さん 「お姉ちゃん達と一緒になら安心だしけ」と話す。</p>	
11:45	<p>スーパーに向かう途中、駅前の店にてエプロンを購入する</p> <p>〇さんがエプロンに興味を示しエプロンを選び始めるとIさんも購入したいと話す。結果2人共気にいった花柄のエプロンを色違いで購入する。それぞれ購入したエプロンを手にし満足した様子。</p>	→店内入り口段差あり。車椅子では入れない
12:30	<p>スーパー内寿司屋到着</p> <p>注文した寿司がくるまでデジタルカメラを見て自分達が写った画像を見て楽しむ。</p> <p>寿司がくると二人とも「こんなお寿司屋さんくるのは久しぶりだね」等話す。</p> <p>二人とも完食</p>	
13:10	<p>スーパー内トイレ使用</p>	→入り口車椅子可能だがトイレ個室には車椅子対応できず
ショッピング 中	<p>スーパー内ゆっくりと一周する。各コーナー(鮮魚や野菜売り場)を回っているうちスタッフが「ホームに残っている方々にお土産を買いませんか?」と提案すると二人共楽しそうにお土産を選びみかんを購入する。</p> <p>〇さん鮮魚コーナーのいけすにいたヒラメに大変興味を持つ</p>	
14:20	<p>ミスタードーナツ到着</p> <p>Iさんが車椅子の為店内でドーナツを選べなかつたので、スタッフが、ドーナツ店店員にメニュー表を借り席に着いてからゆつく</p>	→トイレあるが車椅子は無理。やっと一人が入れる

	<p>りとメニューを選んだ。 二人共ドーナッツが珍しかったようで職員がメニューの説明をした。</p> <p>Iさんトイレ使用 普段杖歩行。外出に伴い車椅子使用。トイレ近くまで車椅子で移動しトイレ内の洗面台等を手すりにしトイレを使用した。</p> <p>ホームへの帰り道は来た時とは違う順路で神田川沿いを歩く</p>	大きさ。
15:30	<p>帰宅 Oさん疲労感のためかやや不穏状態になる IさんOさん共に居室にて横になる</p>	
引継ぎ	<p>夜勤者に引継ぎ グループホームひまわりに残って仕事をしていた日勤者・遅番者特に普段と変わりなく穏やかに過ごしていたとの事。</p>	
その他	<p>外出支援中の様子を家族連絡帖に記入、報告。</p>	担当夜勤勤務中
反省	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に使用する可能性のある施設のトイレの設備(段差の有無、洋式か等)を調べておいた為トイレ誘導はスムーズに行えた。 ・Iさんが車椅子の為段差のある施設を使用できず行動範囲が限られた。 ・外出前に楽しく外出しましょう！と声かけに配慮し準備等も一緒に行った為外出に意欲的だったのでよかった ・慣れない外出先で利用者さんに不安を与えないように明るく声かけを行ったのは良かった 	
夜間状況	<p>Iさん夕食主食全量・副菜8摂取 0時帽子カーディガンを着用し居室内ソファーに座っていることあり。その後トイレ誘導する。夜間1～2時間おきに起きベットにて座位をとっていることあり。</p> <p>Oさん夕食全量摂取夜間特変なく良眠の様子</p>	

Nさん・Kさん外出支援(10月23日実施)

10月5日	家族会にて外出支援の説明と了解	
9月中	勤務表作成の際外出できるよう配慮。 当日誰が外出できるか検討。 当日出勤職員の調整を行った。具体的には職員契約社員の出勤や外出支援担当の職員が出勤できるよう調節。	
9月中	全利用者にどこへ外出したいかアンケートを取る。	→一部勤務外もあるがほぼ勤務中
9月～ 10月	外出支援内容検討	→勤務中
10月15 日前後	外出先のアンケートを参考に居室担当者・引率職員で検討決定 計画書を作成	→勤務中 (30分位)
10月20 日	家族に連絡	→勤務中
10月22 日	外出支援について引率職員に説明	→係り勤務外(約15分) →引率者勤務中
10月23 日 実施 出発前 歩行中 電車内で	<p>普段と変わりなく、居室掃除を行い10時にお茶を飲む。 少し緊張気味の様子有り(Kさん) 血圧高め(Nさん) 「なんだか硬くなっちゃうね」と発言(Nさん)</p> <p>歩きながらスタッフ「今日のお昼何が食べたいですか？何でもいいですよ」の問いに Kさん 「何でも良いのよ前に人は何を食べたの？」と遠慮がちに話、結局希望を言わずスタッフが提案すると「いいね」と同意する。「この間焼肉が食べたいと話していたのよね」の問いに Kさん 「牛フィレステーキの方が食べたいわね」 Nさん 「私は何でも良いのよ。美味しい物なら」 きれいに手入れされている庭を見ながら「あの紫の花きれいね。私も前ベランダで花を育ててたのよ」と話す。 Nさん</p> <p>風景を見ながら「昔武蔵野の史談会という会でいろんな所に旅行</p>	

	<p>に行ったんだけど、その集まりでよく吉祥寺に来てたのよ懐かしいわ。もう皆さん歳を取られたから旅行とか行けなくなっちゃたのよ」と話す。</p> <p>Kさん「楽しみね」を笑顔で車内を過ごす</p>	
食事中	<p>Nさん 昼食のトマトを食し「田舎で食べたトマトみたいで甘くて美味しい」と話す。「こんなの生まれて初めてよ！メンバーが良いからねと」 NさんKさん共にお腹が一杯と一度箸を止めるも、美味しいからとステーキをほぼ完食。</p>	
買い物中	<p>Nさん・Kさん共に吉祥寺を歩きながら売っている物に何でも興味を持ち「これかわいいね」などと談笑しながら、買い物を楽しんだ様子あり。</p>	
井の頭公園にて	<p>Kさん 井の頭公園内のスワンボートに乗りましょうと誘うと始めは怖がっていた様子あるも実際に乗るととても楽しんでいた様子で負けず嫌いの為かNさんのボートを追い抜くよう漕ぐことあり。 ボートに集まっている外国人カップルに手を振り「挨拶しちゃった」と笑顔で話す。</p>	
	<p>Nさん・Kさん共に 井の頭公園駅までの帰り道で色付いた落ち葉を何枚も拾いながら元気な様子で散歩する。</p>	
電車内	<p>Kさん 「こういうのもたまにはいいわよね。また連れてきてよ」 空いた席に座り、行きよりも会話は少ないもさほど疲れた様子見られず</p>	
帰園後	<p>Kさん足の痛み訴え有り Kさん疲れみられるも笑顔あり穏やかな様子あり Kさん・Nさん外出の際のビデオを観て笑っていた</p>	

引継ぎ	夜勤者に引継ぎ グループホームひまわりに残って仕事をしていた日勤者・遅番者より、特に普段と変わりなく穏やかに過ごしていたとの事。 利用者さんが少ない為目が行き届いたが、昼食やおやつ時は人数が少なく寂しい雰囲気があった。 また利用者さんより〇〇さんはいないの？と言うことあった。	
その他	外出支援中の様子を家族連絡帳に記入、報告。	担当夜勤勤務中
反省	<ul style="list-style-type: none"> ・昼食後薬の与薬を忘れてしまったので、与薬を忘れないように予定表などを作ってこまめに見るようにすべきだった。 ・今回利用者さんが女性2名に対し男性職員の付き添いになってしまった。前日に女性職員を引率するよう変更しようと検討するが、当日出勤者では都合がつかず男性職員の引率にて実行することになった。Kさんは普段失禁などあまり見られないが念の為Kさんにはわからないよう失禁対策で下着等の準備をしていった。またこまめにトイレの声掛けを行った。 ・やはりトイレの問題があるため女性スタッフがいたほうがスムーズに行くと思った。 	
夜間状況	NさんKさん共に夕食全量摂取。夜間特変なく良眠の様子。	

FさんIさん外出支援報告(10月10日実施)高井戸駅周辺で昼食と買い物

10月5日	家族会にて外出支援の説明と了解	
9月中	勤務表作成の際外出できるよう配慮。 当日誰が外出できるか検討。 当日出勤職員の調整を行った。具体的には職員契約社員の出勤や外出支援担当の職員が出勤できるよう調節。	
9月中	全利用者にどこへ外出したいかアンケートを取る。	一部勤務外もあるがほぼ勤務中
9月中	外出支援内容検討	勤務中
10月1日	外出支援計画書・報告書の作成	勤務中
前日	家族に連絡忘れる	
10月10日	Fさん家族来園の為外出支援の説明をする。	
実施 10:00	松野委員来園。FさんIさんとコミュニケーションをとる	

12:00	FさんIさんに外出の旨説明着替え等準備 二人ともお金の心配をする。 「Fさんの息子さんからちゃんとお金を預かっているから心配ないですよ」と説明するも不安な様子有り。	
12:10	Fさんポケットに財布を入れている Iさん手提げかばんを自ら持って出かける 他職員に「楽しんできてね…」等言われる 二人とも納得するが…	
歩行中	「何を食しますか?」「何でも良いけど…お金ないよ」と不安げ Fさん「何か怪しいね?」と発言もあり Iさん「私はどこへ行くんだよ～え～」と不安な様子有り。	
歩行中	「ホーム長のおごりだから」と説明すると、 Fさん「さっき言ったことと違うね。怪しいね」と発言有り。 FさんIさん共に「珍しいね～」と冬瓜が柿の実を見ている。 Iさん「いったいどこへ行くの?まだ?帰ろうよ」と言う事あり 始めは利用者さんと手をつなぎ歩いていたがなかなか不安がおさまらず歩行がゆっくりになってしまった為、二人と手をはなし先に進んで歩いた。 職員の後をついて行く形の歩行となる(歩行のみの道の為)	
ファミリーレストランにて	Fさん問題なくファミリーレストランの階段を上るIさん疲れたように職員と手をつなぎ階段を上る。 着席してもなかなか落ち着か無い様子あり。 Iさん表情不安そう メニュー表を見てもらい何を食したいか尋ねるも何でも良いとの事。 FさんIさん共に松野委員がわからず「あんた誰だっけ?」と思い出したように尋ねることあり。 配膳前近くの席に力士が座る。 Iさん「お相撲さんだね、ここは両国か?」と何度も職員に聞くこと有り。	→手すりがない為不便だと感じた。

	<p>又力士の動きが気になる様子で力士を視線で追っている。 食事(まぐろ丼)が美味しかったのか一口食したとたんに二人の表情が笑顔になる。 Iさんは「なんだか分からないが夢を見ているようだね」ということ有り。 Fさん「残すのが悪いなあ始めにご飯を少なくしてもらえばよかったね」と言うことあり。 下膳の際ウエートレスにFさん「ごめんね残しちゃって」と言うことあり。食後にコーヒーを勧めるも今はいらないとのこと。 二人とも財布を気にする様子有り。</p> <p>Iさんのみトイレに行く</p>	<p>→二人とも普通の食事量より多く食す。</p> <p>→トイレ狭い1つのみ車椅子×</p>
歩行中	<p>Fさん問題なくファミリーレストランの階段を降りるIさん職員と手をつなぎ階段を降りる。</p> <p>高井戸駅前周辺自転車が多く歩行困難な為職員と手をつなぐ</p>	<p>→手すりがない為不便だと感じた。</p> <p>→手をつなぐことにより道幅が狭くなり危険</p>
スーパー	<p>Fさん品物を良く見ている。財布を気に「これ買えるかな?」と芋を手にとることあり。職員がグループホームひまわりでの買い物を選んでみると、「マーガリンならこっちのほうがいいよ」と持ってくる。職員が「こっちのほうが安いから」と言うと「安いけど味が良くないよ、こっちにしな」ということ有り。 FさんIさん共に職員見守りにて買い物品の支払いを行う。 Fさん支払い後店頭内パン屋に行く。焼きたて食パンを手にしレジの方へ行き、自分の財布からお金を出し支払いを済ませる。</p>	<p>→店内入り口かなり狭いがスロープあり。店内は椅</p>
喫茶店	<p>職員が食パンを切ってもらえたと話すも「いつもちぎって食べる</p>	

	<p>からそのままでもいい」とパン屋の定員に話す。</p> <p>二人とも普段からコーヒー好きの為喫茶店にて休憩 Fさん職員と共に注文をする。 二人ともケーキを食すと「美味しいね」と表情が変わる。 Iさん思い出したかのように、松野委員に対し「あんたは見たことないね」という事あり。</p>	<p>子などが多い。トイレは車椅子×</p> <p>→近道での帰宅だがガードレール幅狭い。道も傾斜有り。</p>
帰宅途中	<p>買い物した品物を少し持っでの歩行。 FさんIさん途中疲れたと発言聞かれる。</p>	
帰宅	<p>FさんIさん共に疲労感あり。 Fさん「コーヒー飲みに行こう」とIさんを誘うこと有り。 Iさんの部屋にてFさんと番茶を飲み休憩を促す。</p>	
引継ぎ	<p>夜勤者に引継ぎ グループホームひまわりに残って仕事をしていた日勤者・遅番者特に普段と変わりなく穏やかに過ごしていたとの事。</p>	
その他	<p>外出支援中の様子を家族連絡帖に記入、報告。</p>	担当夜勤勤務中
反省	<ul style="list-style-type: none"> ・外出前家族に連絡を入れ忘れた ・お金の出どころが気になる二人だった為職員間でお金の出どころの統一を行っていれば不安が解消されたのではないか？ ・新しい環境に不安になるIさんにとっては少し長い外出支援になって不安な時間が多かったかも ・FさんIさん共に園内の視覚的情報には馴れているが園外の環境には視覚的に馴れていないためか落ち着かない様子が見られた。今後は園外の環境にも徐々に慣れてもらう必要があると感じた。 ・Fさん日常的に売店に出かけたり買い物をしているので、お金の管理が出来ている。今後グループホームひまわりでの買い物等お金の管理が出来るようなケアができたらと思う。 ・Iさんは普段買い物等はFさんの付き合いで行くだけで自ら金銭管理は行っていないが、大関での買い物支払いの様子を見ていると金銭管理ができるのではないかと感じた。 	
夜間状況	<p>FさんIさん共に夜間特変なし Fさん主食 10 副菜 8 汁 10 摂取 Iさん主食 10 副菜 7 汁 5 摂取</p>	

JさんHさん外出支援 世田谷美術館めぐり&昼食(平成16年3月4日実施)

9月中	全利用者にどこへ外出したいかアンケートを取る。	一部勤務外もあるがほぼ勤務中
10月5日	家族会にて外出支援の説明と了解	
12月中	勤務表作成の際外出できるよう配慮。 当日誰が外出できるか検討。 当日出勤職員の調整を行った。具体的には職員契約社員の出勤や外出支援担当の職員が出勤できるよう調節。	
1月中	勤務表を参照し出かけられそうな日を検討。	
12月～1月中旬	外出先をお二人に相談する	付き添い職員出勤時の度
	付き添い職員にて外出案検討・計画書記入	勤務中
	<p>Hさん<つえ歩行・遠出の際車椅子使用> 以前アンケートを取った際パリに行きたいと海外を希望していた方。 旦那様が絵描きだった為以前から旦那様と美術館めぐりを行っていた。現在入院しグループホームひまわりを退去してしまった(1月10付け)方が美術館に行きたいと話していた為その方と一緒にHさんも絵が好きな為外出案を考えた。</p> <p>Jさん<自立歩行> アンケートの希望では新宿にいる姉と食事を取りたいと希望があった方。 普段からHさんと比較的仲が良い関係。Hさんの外出案を話していたところJさんも「美術館に行きたい。絵はわからないが良い物を見れば楽しい」と話した為今回一緒に外出することとなる。再度「美術館」「植物園」「ドライブ」「食事」どれが良いか尋ねると「美術館」を選ぶ。</p> <p><車を使用できない理由> 公用車を使用し保険に加入していたとしても何か事故が起こることの不安がある。また他3施設もまだ公用車使用</p>	
	にて外出したことがないようなので実施は出来ない。 職員が運転するとなると2種免許を持っている者もないので	

	<p>不安が残る。家族にも車を使用しての外出をする了承を得ていない。</p> <p>今年度の外出支援では予算が出るためタクシーの使用が可能だが今後グループホームひまわりで遠出をする外出支援の場合の手段を今後の検討課題としてあげる。家族会等で家族の意見を聞く予定(外出支援を行う際の負担金など)</p>	
	外出支援計画書記入(付き添い職員)	勤務中
1月19日	外出を行うことをご家族に電話連絡(居室担当職員)	勤務中
1月22日	外出支援計画について研修センターへ電話とFAX タクシー会社にワゴンタクシーがあるか問い合わせる	夜勤勤務中
1月27日	<p><下見について></p> <p>出勤職員多く、午後より職員が会議の為午前中の下見が可能ということで午前中世田谷美術館へ下見に付き添い職員1名行く。</p> <p>(10:20~12:00)</p> <p>外出を予定していた1月30日は美術館貯蔵品移動日(1月26日から2月2日まで)</p> <p>また2月9日から16日まで館内整備の為休館</p> <p>美術館内バリアフリー、車椅子トイレ、エレベーターあり美術館入り口スロープあり。</p> <p>車で行く際は正面玄関ではなくレストラン入り口横から入場すると段差ないとのこと。</p> <p>レストラン内車椅子可能。大勢の場合予約可能。別室あり。</p>	
	<p>勤務調整できずまた美術館休館の為すぐに別の外出日は決められず。3月頃に変更となる。</p> <p>外出延期になった旨ご家族へ電話と連絡帳に報告</p>	勤務中
2月27日	<p>外出支援計画書記入</p> <p>外出を行うことをご家族に電話連絡</p> <p>JさんHさんに3月4日に外出する事話す</p>	勤務中
3月2日	必要物品準備	勤務中
3月4日 朝食後	<p>Jさん朝食後薬に下剤付いてあり、本人よりスタッフに「今日出かけるから下剤飲んだら心配よね？飲まない方がいいかしら？」と聞くことあり</p>	
10:00	<p>Hさん前日用意した洋服を着てフロアへ出てくる。</p> <p>Jさんもコーヒーを飲んだ後自分で選んだ洋服をきてフロアへで</p>	

11:50	<p>て来る。2人とも 11:30 分に出発と話していたが 11 時頃よりバッグ帽子等をすでに出かける仕度をしそわそわしていた様子あり。出発まで皆と歌を歌って過ごす。</p> <p>タクシー呼ぶ。その後1階へ移動</p> <p>居残るスタッフに「気をつけて、お土産待っているね」と言われ Jさん「行って来ます！」と笑顔で話す Hさん車椅子にて移動 エレベータ内にて スタッフ 「美術館は静かにしないといけないから緊張しますね」 Jさん「そうね緊張しちゃうわ」</p>	
12:00	<p>タクシー到着</p> <p>タクシー内では美術館のパンフレットやレストランのパンフレットを見る。</p>	
12:05	<p>スタッフ「何食べますか？」 Jさん・Hさん「わかんないわ～でもなんだか良さそうなお店ね～」とパンフレットを見る。</p> <p>スタッフ 「ランチで1600円から2100円ですよ。どうする？フランス料理だからフォークとナイフ使うんですよ、箸は無いかな？」 Jさん 「あら高いね。私、水だけでいいわ、みんなの残り食べるわ」と笑いながら冗談を言う。</p> <p>スタッフ 「JさんHさんは昔、美術館よく行かれたんですか？」 Hさん 「昔主人とよく行きました。世田谷美術館も行った子とあるわよ」 Jさん 「私は行ったこと無いわ、趣味でもないし、主人も連れて行ってくれなかったしね。私はどこでも連れて行ってくれるならついて行くわ。たまにはこういう風に出かけるものいいわね」</p> <p>スタッフ「お腹すきましたね」 Jさん「そんな大きな声で恥ずかしいわよ。」 Hさん</p>	

	<p>「みんなお腹すいているけど、タクシーの中だから静かにね」と笑いながら話す。</p> <p>スタッフ「ここは環状八号線ですよ。通ったことありますか？今日は空いているけどここはいつも混んでいるんですよ」</p> <p>JさんHさん「ないわ。環八ね」</p> <p>スタッフ「この道沿いには沢山有名なラーメン屋さんがあるんですよ」</p> <p>Hさん「いいわねラーメン」</p>	
12:25	<p>美術館横レストラン到着</p> <p>Jさん「早く着いたわね」</p> <p>レストラン昼食時の為か混雑。タクシーの中でもお腹がすいたと話していた為順番を待つ。</p> <p>Hさんトイレはじめ出そうも無いわと、トイレを拒否するが、スタッフが食事などをすると1時間くらいかかりますよ、と話すとトイレに行く。トイレまでの道のりで「きれいなところね。モダンでいいわ。初めて来ました。」と話す。車椅子トイレの前廊下を通ると「あれ？ここには来た事があるかも？」と話す。</p> <p>Jさん公園の方を眺めながら「きれいね、いいところね」と話す。</p> <p>「ずっと東京に住んでいるのにこんな所があるなんて知らなかったわ」</p> <p>スタッフ「今度息子さんと来たらどうですか？」</p> <p>Jさん「そうね息子は車を持っているからいいわね」</p> <p>JさんHさん「お腹すいたね」と言うことあり</p> <p>公園内犬を散歩しているひとを見てJさんHさん共に「可愛いわね」と話す。</p> <p>J「うちも昔犬を飼っていたのよ。土佐犬は大きくてね、私が散歩されてたわよ。その後小型犬を飼ったの。大きさがぜんぜん違うのね。食事代も違うのよ。土佐犬は切り無く食べるから与える量を加減したけど小型犬は少ししか食べないから」と話す。</p> <p>Jさんハンバーグセットを注文</p>	<p>美術館横レストラン駐車場あり。レストランまでもバリアフリー。</p> <p>レストランから美術館連絡通路あり。</p> <p>車椅子トイレ使用</p> <p>Jさん普段土佐犬の話はするが小型犬の話ははじめてでる。</p>

<p>13:00</p>	<p>Hさんステーキセットを注文 店員にパンかライスどちらにしますか？言われ 「お腹がすいているからご飯がいいわ」と話す コース料理のかぼちゃスープが届く JさんHさん「おいしいわね」 Jさん「かぼちゃをこんな風にして食べるなんてね」 スタッフ 「スプーンで飲むと慣れてないから時間がかかりますね。」 Jさん「Hさんはこういう所慣れているから上手に飲んでいるわよ。私はそのまま飲んじゃおうかしら」とはじめはスプーンで飲むが、最後はカップに口をつけ飲む。 JさんHさんお肉を食し「柔らかくって美味しいね」 Hさんは普段野菜を多く残すがステーキに添えられた人参グラッセやサラダすべて完食。 スタッフ「デザート注文しますか？」 JさんHさん共に「もう要らない」と話す。 店員がデザートの説明に来ると Jさん「やっぱ食べようかな？」とクレーム・ビュルレを注文する。 カタカナのデザートに「なんだかわからないけど・・・」と話す 4人で「クリーム？？クレーム・ビュルレ」と口が回らず笑いながら待つ。 食事中公園内犬を散歩している人たちを見かけ JさんHさんともに「可愛いね」と話す。 デザートが届くとクレームビュルレを半分になっている。表面を割りながら「硬いわ」と話す。 スタッフ「なんで半分にしているの？」と聞くと Jさん「あなたに半分あげるわよ」とデザートを注文していないスタッフに分けてあげようと準備していた。 美術館チケットに“小磯良平展”と書いてあるのを見て Jさん 「昔からこの人の絵が好きだったのよ、婦人画報とかに書いていた人で、切り抜きをして持っていたわ、うれしいわ～」と話す。</p>	
<p>13:40</p>	<p>Hさん特に反応なし <Jさんの様子> 小磯良平の絵を見るたび付き添いスタッフに上記の話をする。 「この人の絵は女性をいつも描いているのよ、それでその女性</p>	

	<p>はたいてい悩ましげな女性が多かったわ」と絵を見ながら話す。 裸婦の絵を見るたびに付き添いスタッフに 「嫌ね・・・恥ずかしくなっちゃうわ」ということあり。 小磯良平の絵は終わり現代美術になり、色鮮やかな絵を見て 「わあ～」と驚く。 「歩いてても歩いててもたくさん展示されているわね」と話す</p> <p>世田谷区民の展示会場に着き現代の美術を鑑賞 「色が鮮やかだね。よくわからない絵だわ。これも変わっているわ ね」と話す。</p> <p><Hさんの様子> 車椅子に座っている為、絵に近寄りすぎると見えづらい様子伺 えたが、展示されている絵のタイトル一つ一つ読んでいる。 スタッフ「タイトルを読んでから絵を見ると抽象的なものは少し理 解できるね」 色使いなどで奇妙な絵のところでは 「へえーこれ変わっているね」と話す</p> <p>たくさんの絵をが展示されていたので次第に JさんHさん共に疲れた様子あり。 Jさん途中ベンチに座り「あー疲れた」と言う Hさん「本当ね疲れたわ」と話す</p> <p>売店にて スタッフ「何か買いますか？」 Hさん「欲しいものは無いからいいわ」と購入せず。 Jさん「小磯良平のどの絵がいいかしら」と絵葉書を見ている。ス タッフと共に見て購入する。「モダンな絵でいいわ」と話す。 売店内にちりめんで作られたバックやポーチを見てきれいねと 話す。</p>	
<p>タクシー内 14:45</p>	<p>JさんHさん共に疲れたわと話す。行きの車内より会話少ない。 行きは晴天だったが帰り雨が降ってくる。 Jさん「よかったわね」と話す。</p>	
<p>15:20</p>	<p>到着</p>	

帰宅後	HさんJさん共に「疲れたわね」と話している。 Hさんはおやつ後すぐに、他入居者が行うトランプに参加するが、Jさんはとても疲れた様子でテレビを見ている。	
引継ぎ	夜勤者に外出での様子引き継ぐ	
その他①	<p>①グループホームひまわりに残ったスタッフより 普段と変わりなく過ごしたとのこと おやつ時自分の席の前に居ない2人に気がついたのか静かねと言う入居者さんあったとのこと。</p> <p>②通常(9時～12時30分)出勤スタッフ4名(2ユニット2名づつ)だが1丁目ユニット2名、2丁目ユニット1名となる。以前より企画していた為職員数少ないが、各ユニット実習生1名いるため実行することになる。 前月分食費も少し残っている為昼食は出前を取るようになる。以前外出するスタッフは昼食を作り出かけていたが、今回昼食作りが無い分時間的余裕がある。しかし遅出職員が出勤してくるまでは外出できず、予定より30分遅れての外出となる。遅出職員は本来12時30分からの業務だが40分前ほどから出勤していた為30分前から仕事についてもらう。外出付き添いスタッフ帰宅後入浴を開始する。</p> <p>③タクシー使用の際、歩行安定しているJさんを先に乗せスタッフが次に乗車し、乗り降りがスムーズにできるようHさんと順に乗車する。Hさん乗車する際、車に腰を下ろしてから乗車したが、足が上がりず困難な様子あり。</p>	
夜間状態	夕食量 Jさん特変なく良眠の様子 Hさん23時30分頃眠れないとフロアに出てきて30分程スタッフと話して過ごす。	
その他② 反省など	<ul style="list-style-type: none"> ・Jさんは外出支援後しばらく美術館に行ったことを付き添いスタッフに礼を言うことあり。また今度息子が来たら話すわと言っていた。 ・始めて行く場所だったので下見をしておいて良かった。 ・実施前には余り美術館に興味がないようなJさんがとても興味を持ち美術館めぐりを喜んでいたのがとても印象的でした。 	

	<ul style="list-style-type: none"> ・公園散策を予定していたが時間が無く行えなかったのは残念だった。 ・今回JさんHさんが外出することにより出発前や前日などを含め生活にはりがもてたのではないかと感じた。今後JさんHさんのケアプランにも外出を含めたらいいと感じた。 ・出発時は天気も良く暖かい日だった為外出するにも楽しい気持ちになれた様子。二人共早めに準備しそわそわしている等心待ちにしている様子が伺えた。別の場所での食事をするということは気分も変わってとてもよい事だと思う。 	
--	---	--

グループホームひまわり
TさんMさん外出支援
ドライブと昼食と園内散歩(平成16年1月26日実施)

9月中	全利用者にどこへ外出したいかアンケートを取る。	一部勤務外もあるがほぼ勤務中
10月5日	家族会にて外出支援の説明と了解	
12月中	<p>勤務表作成の際外出できるよう配慮。 当日誰が外出できるか検討。 当日出勤職員の調整を行った。具体的には職員契約社員の出勤や外出支援担当の職員が出勤できるよう調節。</p>	
1月中	勤務表を参照し出かけられそうな日を検討。	
	<p>付き添い職員に外出支援の内容注意等説明 ・会議の流れや今まで行った外出支援の件や注意点などの説明</p>	<p>付き添い職員夜勤勤務中 説明職員30分 勤務内残り1時間 勤務外</p>
	付き添い職員にて外出案検討・計画書記入	夜勤勤務中
	<p>Mさん 普段より発語みられず、アンケートにて外出先の希望取れず。自立歩行可能だが、普段自ら歩くことあまりなく、手つなぎ介助にて歩行がほとんど。園外を散歩の際はシルバーカーを押しながら歩行。</p>	

	<p>Tさん 自立歩行可能。散歩時はゆっくり杖歩行。長距離(阿佐ヶ谷へ出かけた際は)は車椅子を使用。MさんTさん共に歩行力が同じの為外出のペアを決定。 Tさんに外出の希望を取ると書道展に行ってみたいとのこと近郊(吉祥寺)を調べるもなし。 深大寺植物公園散策を考えるも、外出日の調整がつかずまた下見が出来ないため、付き添い職員の自宅近くの和風レストラン藍屋に食事に行くことになる。 外出企画当初、車を使用しての外出を検討したが、最終段階にてタクシーを使用しての外出に変更になる。</p> <p><下見が出来ない理由> 当初下見日を家族会がある職員出勤が多い18日に予定していたが、当日入居者さんの引越しが2件ある為グループホームひまわりでの生活が落ち着かないことを予想し勤務を抜けられない状態であるため下見日がなくなった。ほかの日を検討してみるも勤務の調整つかず、又外出日を変更しようかと考えたが出来なかった為下見を行わずいける範囲でのコースとなる。</p> <p><車を使用できない理由> 公用車を使用し保険に加入していたとしても何か事故が起こることの不安がある。また他3施設もまだ公用車使用にて外出したことがないので実施は出来ない。 職員が運転するとなると2種免許を持っている者もないので不安が残る。家族にも車を使用しての外出をする了承を得ていない。 今年度の外出支援では予算が出るためタクシーの使用が可能だが今後グループホームひまわりで遠出をする外出支援の場合の手段を今後の検討課題としてあげる。今後家族会等で家族の意見を聞く予定(外出支援を行う際の負担金など)</p>	
	外出支援計画書記入(付き添い職員)	夜勤中
1月22日	外出を行うことをご家族に電話連絡(居室担当職員)	勤務中
1月22日	外出支援計画について研修センターへ電話とFAX タクシー会社にワゴンタクシーがあるか問い合わせる	夜勤勤務中

1月26日 実施	特に普段と変わりなく、過ごされている。	
出発前	引率者と10時のお茶を飲む。 Mさんに外出支援の旨説明着替え等準備 MさんTさんタクシーはバラバラに乗車	
Mさんタク シーの様 子	Mさんの様子 タクシーのドアが開くと頭を気にしながら乗車する。タクシーが動き出すと周りをキョロキョロと微笑みながら見ている。ワーカーが声かけするも景色が気になるようで、時々ひょうきんな表情あり。 入り口では靴のまま上がろうとする行為あり。靴を脱ぎ下駄箱に向かうが普段と違う下駄箱だからか靴をしまう様子ない為、ワーカー介助にて下駄箱に靴を入れる。下駄箱の木札を取るのに少し戸惑っているので説明しながら札をとりコートポケットに入れる。 Tさんを待っている間・・・ 周りの様子をみて行き交う人を目で追う少し興奮気味 Tさん到着	店内照明オレンジ色で暖かい雰囲気。普段生活しているときに比べるとすこしくらい感じ。
Tさんタク シーの中	Tさん 「タクシーでお食事に行くだなんて贅沢だね」目に付いた文字を大きな声を出して読み上げる。 車内では車内の広告物「忘れ物をありませんか」「毛はえ薬」等。タクシーの窓から見える景色を眼で追いかける。「あの建物は何ですか」「建物がたくさんあるのね」「ここは荻窪かしら」との弁。タクシーから降り「どうもありがとうございました」とタクシーにむかって手を振る。	
TさんMさ ん合流	Tさん この中から好きなものをたのんでみましょうとメニュー表を見るも「こんなに写真ばっかあってもわからないよ」と眉間にシワをよせ	お店の方にお二人のご飯を少なくしてもらおうよう注文

食事前	<p>る。これにしましょうかと勧めるも「980円。こんなに高いもの食べられないよ」</p> <p>Tさん店員に「お勧めは何」と聞くも</p> <p>「へえ～、そうですか」「なにがなんだかわからない」と笑顔でリズムカルに言う。</p>	する。
食事中	<p>メニュー決定まで約20分間。</p> <p>メニューから食事選ぶことでず、ワーカーが皆と同じ物を注文。</p> <p>食事がくるまで雑談</p> <p>Tさん</p> <p>「盆と正月がいつぺんにきたみたいだね」</p> <p>「ここはお客さんがたくさんくるんだね」と言うことあり。</p> <p>ワーカーが「いただきます」と言うと、Tさんがついて「いただきます」と言う。</p> <p>Tさん「こんなご馳走食べて良いのかしら？」と元気よくはなすことあり。</p>	
排泄	<p>Mさん様子</p> <p>はじめは本人に任せて食していただく。口にたまることはなく食べているが、箸の進み具合が悪くなり色々の料理を箸ではさむが口に運ぼうとしなくなる。箸を置く行為ない為、ワーカーが小皿に食事ももり自ら小皿を使用して食す。普段は食事を口の中に溜め込むことあるが、口に溜め込むことなく食す。</p> <p>T・Mさんともにトイレ使用する</p> <p>Tさん</p> <p>ワーカーと共に「段差があるから気をつけましょう」とお互いに伝えながら話していたが、段差を降りた瞬間に床に足を滑らせ転倒。左後頭部にコブあり。Tさん「なんだかここを打ったんだよね」とその後何度も話し落ち着かなくなる。</p>	<p>トイレは介助するには使い勝手が悪い。</p>
	帰宅のタクシーでの様子	

帰りのタクシーの中	Tさん頭を気にしている 「私ね、タクシー代忘れてきちゃった。支払ってくださる？」 Mさんワーカーが料理美味しかった等話し掛けるも特に変わりなくしている。見慣れた浴風会内に車がつくと安心したような表情あり。	
帰園後	Tさんナース連絡し処置し、横になる。バイタル異常なし。 Mさん疲れ見られるも笑顔あり。 二人共居室にて休まれる。 Tさん コブ部分に2cmほどの切り傷あり。BP120/70 P80spo299%	
引継ぎ	転倒状態を夜勤者に引継ぎ グループホームひまわりに残った職員普段と変わりなく穏やかに過ごしていたとのこと。	
その他	①外出支援の様子を家族に電話にて報告。(Tさん) ②家族会のためご家族来園す。付き添い職員転倒状況説明 ③外出支援の報告を家族連絡帳に記入	①付き添い職員勤務中(当日) ②2月1日付き添い職員勤務外(30分ほど) ③勤務中
反省	違う環境に行くときは、日常生活時以上に十分な配慮が必要である。	
夜間状況	Tさん Mさん共に夕食ほぼ全量摂取。特変なく良眠の様子。	

UさんKさん外出支援 富士見ヶ丘周辺散歩&西友で買い物&喫茶
(平成 16 年 3 月 19 日実施予定・延期)

9 月中	全利用者にどこへ外出したいかアンケートを取る。	一部勤務外もあ
------	-------------------------	---------

		るがほぼ勤務中
10月5日	家族会にて外出支援の説明と了解	
2月中	勤務表作成の際外出できるよう配慮。 当日誰が外出できるか検討。 当日出勤職員の調整を行った。具体的には職員契約社員の出勤や外出支援担当の職員が出勤できるよう調節。	
2月中	3月の勤務表を参照し出かけられそうな日を検討。	勤務中 一部勤務外あり
	付き添い職員にて外出案検討・計画書記入	勤務中 一部勤務外あり
	<p>Uさん<自立歩行> 以前アンケートを取った際「主人が死んでしまったので、どこへも行きたくない」と言うも、普段から良く話しに出る鎌倉に行きたいですねと誘うと「鎌倉に行きたい」ということあり。</p> <p>Kさん<自立歩行> 入所が平成16年1月だった為、アンケートは取らず。 日常的な歩行には問題ないが、散歩時疲れた様子時々あり。</p> <p>年度内にグループホームひまわり入居者全員外出支援を行いたく、下見など行わなくても外出できる近場を検討した。</p>	
月日	外出支援計画書記入(付き添い職員)	勤務中
3月日	外出を行うことをご家族に電話連絡	勤務中
延期になった理由	<p>予定をしていた3月19日出勤予定7名だったが、職員家族に不幸があり、夜勤勤務等変更。当日出勤スタッフ6名(内ホーム長1名・班長1名・夜勤専門スタッフ1名)</p> <p>出勤。入居者さんで血圧が上昇・熱発あり受診などあり。外出する為スタッフ2名抜けることはスタッフ手薄になってしまい、グループホームひまわりでの生活支援が難しいと考えられた為外出支援は延期となる。</p>	勤務中
月日	外出延期になった旨ご家族へ電話と連絡帳に報告	勤務中

TさんYさん外出支援 井の頭公園散歩 (平成16年3月23日実施予定・延期)

9月中	全利用者にどこへ外出したいかアンケートを取る。	一部勤務外もあるがほぼ勤務中
10月5日	家族会にて外出支援の説明と了解	
2月中	勤務表作成の際外出できるよう配慮。 当日誰が外出できるか検討。 当日出勤職員の調整を行った。具体的には職員契約社員の出勤や外出支援担当の職員が出勤できるよう調節。	
2月中	3月の勤務表を参照し出かけられそうな日を検討。	勤務中 一部勤務外あり
	付き添い職員にて外出案検討・計画書記入	勤務中 一部勤務外あり
	<p>Tさん<自立歩行> 入所が平成15年10月だった為、アンケートは取らず。</p> <p>Yさん<自立歩行> 入所が平成16年1月だった為、アンケートは取らず。</p> <p>年度内にグループホームひまわり入居者全員外出支援を行いたく、下見など行わなくても外出できる近場を検討した。また二人共歩行安定の為電車を利用しての外出案を検討する。また雨天の場合は吉祥寺駅ビルをウインドウショッピングする計画も立てる。</p> <p>その他新宿への寄席も検討するが今年度は外出支援を始めたばかりで、何かあったらすぐにスタッフが応援しに行ける範囲で行うこととし、次回検討とする。</p>	
月日	外出支援計画書記入(付き添い職員)	勤務中
3月日	外出を行うことをご家族に電話連絡	勤務中

延期になった理由	予定をしていた3月23日出勤予定7名だったが、職員家族に不幸があり、夜勤勤務等変更。当日出勤スタッフ6名(内ホーム長1名・班長1名)出勤。外出する為スタッフ2名抜けることはスタッフ手薄になってしまい、グループホームひまわりでの生活支援が難しいと考えられた為外出支援は延期となる。	勤務中
反省	新入所であるKさんYさんご家族に外出支援の説明をするのを忘れてしまった。	
月日	外出延期になった旨ご家族へ電話と連絡帳に報告	勤務中

4. 実践してみでの職員の感想

すべての外出支援の取り組みが終了した後、職員に対して、外出支援の実践の課題を明らかにする目的で、以下のようなアンケートを行った。

- 設問1 外出支援を行ってみてよかったこと、学んだこと、気づいたことなどを具体的に教えてください
- 設問2 今後外出支援を実践していく上で、課題となること、より検討が必要なことについて具体的に教えてください
- 設問3 上記の「外出支援の今後の課題」を克服していくための具体策について何かありましたら教えてください。
- 設問4 その他、委員会・実践に取り組んでの感想・要望・意見等ございましたらどうぞ教えてください。

① アンケート結果

設問1 外出支援を行ってみてよかったこと、学んだこと、気づいたことなどを具体的に教えてください

回答者 NO
文章コード 回答

1	1	外出支援を行うことにより、利用者の違う一面が見られた。
	2	園の中にいるのではなく、外に出ることによって、心身のケアになると思った。
2	1	外出することにより、表情が良くなったり言葉が増えたり、した利用者を見て、この外出が日常のものでなければならぬと感じました。
3	1	一時的にでも利用者の方々に楽しい、嬉しいなどの思いを感じていただけた事。

	2	そのことを覚えておくことは難しいけれども、その方にとってそういう一瞬が提供できることは、私たちにとってはうれしくとてもよかった。
4	1	利用者は施設内から外に行かれるということにとても喜びを感じているようです。
	2	歩いている途中の会話の中から、意外な面を知ることができ、それによってより深く利用者を理解したりします。
	3	外へ出たときの開放感、驚き、社会とのつながり、在宅では当たり前な出来事なのに、施設ではなぜか特別のここのように扱われています。
	4	日常生活の中で、少しでも多く取り入れてあげたいと願っています。
5	1	職員の利用者さんに対する見方が変わったこと
	2	どんな外出がその方にとって有効であるか、趣味、職など、過去の生活を思い起こしていくために情報収集、レクを通じて発見を見逃さずに変化を感じる目ができてきたこと
6	1	外出することで、利用者の新たな一面に気づくことができる。
	2	とにかく出かけてみようという最初のステップとしては、上から指示を出して出かけるのではなく思い付きを実践に移せた点で収穫は多かった。
	3	少人数、近場、短時間条件を整えれば少ない職員でも外出を行うことは可能。
	4	課題としては外出する職員・残る職員の情報共有、外出の重要性をどのように周知していくか
7	1	外出支援を行って施設内では見られない利用者の方の顔(笑顔)。
	2	話が聞けることができた。
	3	利用者のご家族がともに外出されるだけで利用者の気分的なもの(明るさ・表情)がまったく違った。
	4	利用者にとっての家族の大切さ、絆の強さがわかりました。
	5	今現状での施設内でのマンネリ化した生活では、りようしゃにとっていいのか？
	6	外出等をする事(行きたい場所へ行く)事によって利用者の生きがい楽しみをもっと増やし、日常化することができたらQOL向上にもつながると思いました。
8	1	外出支援の外出に当たっての準備、移動手段の検討(徒歩、または車など)をまず考え、そこから目的地を設定する。
	2	目的地が車椅子利用可能かどうか、行く途中にトイレがあるかどうかを留意しました。(歩ける方でも体調の急変等あるため)
	3	利用者の体調の確認→体調の確認も大事であるが下剤の調整がw-カーとしては一番大切だと思いました。
	4	利用者にとってせつかくの外出であっても辛いものになると思います。
9	1	施設の中にいるときとは異なる環境はプラスにもマイナスにも作用すると思われる。
	2	リスクを完全に排除することはできないということを踏まえて、
	3	施設としてどのようにこの活動を支えていくかきちんと位置付けなくてはならない。

4	いずれにしても家族の期待は大きく、たとえ理解を得た上でのことであつたとしても、事故が起こった際には、対応は十分だったのかどうか職員等の責任が問われる。
5	そのような状況の中で安全への配慮を重視するあまり、自分自身が萎縮していたのではないかと思う。

設問2 今後外出支援を実践していく上で、課題となること、より検討が必要なことについて具体的に教えてください

回答者NO	文章コード	
1	1	本人(利用者)のADLの再確認。
	2	現地の事前に調査をする。(道の凹凸、幅等)
2	1	費用の問題。
	2	事故保険の問題(ボランティア・家族)
3	1	外出がとてもし刺激や気分転換になることは誰もがわかっているし、できればそういう機会が提供できるようにしたいと思っている。
	2	課題となるのは、業務の中でどう組み込むか。
	3	業務を見直して、無駄を省く。
	4	優先順位を考えて業務を行う。
	5	それでも時間をとるのが難しいのなら、人員を増やすことだと思う。
	6	危険に対する認識、家族の方々に対する危険を含めた説明と同意、園や法人として、どの程度まで可能かの確認、方針等ははっきりさせておくと現場も安心して利用者の支援に専念できる。
4	1	外出に付き添う人数不足
	2	準備段階での大まかなマニュアル作成
	3	遠出したとき・外食したときの費用の問題
	4	事故の問題
5	1	業務中心であった業務時間の中でどのように習慣的に自然に行っていくこと
	2	特養の組織の中でピラミッド内の全職員の外出に対する考えを統一し、リスクや業務に対して組織の連携と協力体制
	3	職員の満足でなく、利用者の本当の満足には“これで良い”ことがないことを常に思える心
6	1	利用者の視点に立ってその人の表現されない希望や本当の幸せについて考えてみるという姿勢。
	2	“外出する”という事象に囚われずに、その人らしくあることを求め続ける中で、職員も利用者もお互いを発見できる。

	3	施設内の〇〇さんではなく、社会の一員としてのその人を再発見する。→日常生活への還元
7	1	園全体の外出支援への協力
	2	ご家族への協力の依頼
	3	ボランティアの協力(外出に行く際に付き添いをしてくれるボランティア、外出へ行く際園内で他の利用者の見守りを行ってくれるボランティア)
	4	外出に行く際の人員の確保(残った利用者の対応含め)
8	1	一番の課題は、外出支援を継続していくことだと思います。
	2	そのためにもボランティアの確保は切実な問題だと思います。
	3	今後もワーカーの出入りにより人手不足などの問題などが起こると困難だと思います。
9	1	施設『内』での生活と外出支援をどのように結び付けていくか。
	2	『ハレ』としての外出(行事等)だけでなく日常生活の延長線上に位置付けることができるか、そのような支援体制が可能かどうかということについてさらに検討する必要があると思われる。

設問 3 上記の「外出支援の今後の課題」を克服していくための具体策について何かありましたら教えてください。

回答者NO	文章コード	回答内容
1	1	もっと定期的に計画し、実施する
	2	職員に対し、マニュアルを作成し理解を深める。
2	1	インフォーマルサービスの活用
3	1	研究として進めていくだけであるのなら、園と研究機関とで、どこまで掘りさげて行うのかはっきりさせてほしい。
	2	そういった上で家族に対する説明、どう業務の中で機会を作るかが具体的にできると思う。
	3	この研究を元に実際に利用者の方々に支援を行っていく考えが、園や法人としてあるなら、委員のメンバーもそのつもりで職員に対して説明ができると思うし、職員の教育を行っているものと協力して全体の職員に理解してもらった上で、支援体制が作っていけると思う。
4	1	ボランティアや家族に声かけ
	2	企画から前日までの共通したマニュアル
	3	どこまでは利用者負担、園ふたん職員個人負担かを明確にしておく
	4	施設でマニュアルを作成しておく
5	1	介護レベルのアップと職員の統一した方向性

	2	まずはリスクに対して早期に対応できる柔軟な気持ち(考え)
	3	ケアプランの中で、困ったニーズではなく生きがいを考えながら困ったニーズを克服できる考え方
6	1	今後もまず外に出て行くことで外への抵抗感、壁をなくすことを目指す。
	2	その上で、個別の要望(外が好きとか嫌いとかも含め)に目を向けてゆく方法が良いと思う。
	3	計画を立てる際のプロセスをある程度決める。
	4	それで何度か実践し、目標達成度を確認しつつ個別計画を作成していけるように。
	5	車両、交通、金銭の扱いについても共通認識を持てるように整備する。
	6	家族を巻き込む手法、外出をしたいさせたいと思っても言い出せなかったり、家族だけでは不安を感じるために外出できない潜在的な要望を掘り起こす。
	7	(ボランティアについても同様)
7	1	ボランティアの協力が急務であると思います。
	2	ただ現在他の園でも行っている食事介助のボランティアや清拭たたみ、ベットメイク等のボランティアは正直協力してくれる方が少ないと思います。
	3	利用者との関わり、外出へ行くことや外出へ行かない他利用者とのコミュニケーションならば、学生等は興味があると思います。
	4	実習に来ている学校や近隣の学校にボランティア協力を呼びかけていくのもいいと思います。
8	1	各フロアに外出支援の係りなどを設けて取り組みについてもっと広めていく必要があると思います。
	2	人員の確保。
	3	外出支援の日を行事等に取り入れる。
9	1	職員への意識を高めること。共通の目的をもって取り組むこと。
	2	ボランティアを組織化し、希望する人には講習・研修の機会を提供することで継続的な活動のために利用者にとっても安心できる存在を確保する。
	3	職員との相互の信頼関係も向上し、ボランティアのやりがいにもつながるのではないかな。

設問4その他、委員会・実践に取り組んでの感想・要望・意見等ございましたらどうぞ教えてください。

回答者NO	文章コード	
1	1	(回答なし)

2	1	(回答なし)
3	1	短い時間で外出を組み込むのは、難しかった。
	2	それだけでなく、職員に対する理解と協力を得るのも不十分で、実際利用者の方々に は良いことだとわかっている、それを支える体制が整わずに無理に実行したため不満 も多かった。
	3	どうしても日常の業務が多くて、外に出るということは後回しにされがちである。
	4	でもお互いが楽しいことをすることができると思うし、外の食うkはまた違う影響がある。
	5	外に出るということが、当たり前の日課のようなものになってほしいと思うので、まず現場 の職員に詳しく説明して、みなで取り組む研究にしてほしいと思う。
	6	予算の関係などから、今年度の研究の開始は、また7月ごろになるのだと思う。
	7	それは時期を変えるのが難しいと思うので、7月に今年度もまた行うことが決定している のなら、それまでの間に職員の協力を仰いだほうが良いと思う。
	8	どうしても現場の仕事であり日々対応が変化することもあるから、早め早めに段取りして ほしい。
	9	そして、研究の結果が私たちにも利用者様にも良い結果になってくれればと願ってい る。
4	1	(回答なし)
5	1	特養であることの方の考え方のきっかけを頂き、仕事に幅と楽しさを感じました。
	2	喜びを感じつつ、これからの習慣性に変えていくためにいくつもの課題が山積みにされ ていると思っています。
6	1	外出に対する認識が、職種や施設によって異なる点、制限となっているものは何かを考 える機会となった。
	2	委員会終了後、どのように今後につなげていけるかが、最大の課題。個人的に楽しみ でもあります。
	3	施設としてどのようなフォローを行ってゆけるか、地域資源等も含めて活用を考えていき たい。
7	1	委員会に参加することで自分にとって外出支援の重要性が学ぶことができました。
	2	委員会に参加する際、委員の方で前もって日程(第何週の何曜日という具合)を決めて もらったほうが参加しやすい。
	3	夜勤明けで参加すること等があったので、辛かった。
8	1	委員会に参加することで他のフロアーの取り組み・ワーカーの考え方など知ることができ てよかったと思う。
	2	シフトの都合でほとんど参加できなかったもので、月1回でなくつき2回ぐらい行ってくれ ればと思いました。

9	1	利用者の生活の質を高めるための取り組みとして、リスクが高いからといって徒に引きこもるのではなく、
	2	けれども想定しうる危険は回避する努力をしなければならない、と頭ではわかっていることでもとにかく、
	3	事故を起こす可能性を高めるようなことを「わざわざ」することにどうしても気持ちがついていかなかった。

5. 考察

以上のような結果から、外出支援の意義と試行の方法について検討し、それを踏まえた外出支援におけるボランティアの活用について、そのあり方を考察する。

(1) 外出支援の効果として現れたと考えられる利用者の反応

外出支援を展開していく中で、その効果と考えられる事例が見られた。外出支援の意義と絡めて考察したい。

1) いつも口数の少ない方が、外出中は終始話し続けていた。

記録として挙がってきたのは、外出支援の最中、介護職員が普段口数が少ないと考えている痴呆性高齢者であっても、外出中は話しかけや会話が観察されるということであった。特に、歩いている最中に遭遇する子供や、犬・猫などの動物については、高い関心を示され、話しかけなどのアクションが示されたという報告が見られている。

このような行動が見られた理由として、ひとつには建物の中で生活行為のすべてが完結してしまう環境が関係していると考えられる。そのような環境においては、生活の内容は固定化されやすく、人間関係も限られた範囲でのものとなる。特に子どもや動物については、普段町の中を歩いていれば簡単に遭遇するものであるが、そのような環境下に長い間置かれた痴呆性高齢者にとっては、いつでもどこでも対峙できる存在とは捉えられず、特に珍しいものとして写ったという可能性が考えられる。

さらに、対峙する機会の過多に関係なく、子どもや動物に会うということは、それだけでほほえましい感情を誘発する出来事であり、痴呆の症状を呈している高齢者であっても、子どもの様子を認知しほほえましい存在であると感じられたがために、子どもに話しかける、動物に話しかけるという行動が生まれたものとする事もできる。(子どもや動物に遭遇して、かわいいと感じたり、ほほえましいと思ったりすることが、普遍的な感情であるとする、限られた範囲の中での生活の中に子どもや動物を連れてくるという事も可能ではあるが、より簡単

に自然な生活の流れの中でそのような感動を味わうことができる外出は、しかるべく提供されるべきであるといえるだろう。)

また、このような心理的活性が見られた背景のひとつとしては、外出先の環境が普段の生活と異なり、刺激にあふれていたということが関係しているように考えられる。高齢者の生活施設においては、高齢者が生活しやすいような物理的障害が極力排除され、安全・安心な環境設定がなされているところが多い。これは、生活を作り上げていく上で、重要な環境設定の視点であるが、翻って考えると高齢者自身が段差を気をつけたり、ぶつからないように注意したり、というような周囲への注意力を極力使わないようにさせる環境設定という側面もあるといえる。安心が得られる反面、注意力・集中力を働かせて気をつけるということがなくなり、周囲への関心が低い状態となるという意味では、心理的活性化という観点からは、安心安全な環境設定は、必ずしも有効とはいえないといえるだろう。外出においては、外出先についての情報もない中、周囲の環境と自分の身体機能を調整しながら、ある程度集中して過ごす必要が出てくる。周囲への関心の向上が、心理的に活性化されやすい心の状態をつくりだし、子どもへの関心や発語の頻度の向上の背景としてあるのではないかと考えられる。これらの関連の実証については、今後の課題としたい。

2) 普段の生活とは異なる社会の中の人としての役割が取れる

自分のことはできる限り自分で行いたいという希望を持っている方であると介護職員が評価している痴呆性高齢者で、たとえば施設生活においては、お茶がほしいときなど自分でもらいに来る方が、外食の際には、介護職員がお茶を持ってくることを申し出ると「いいのよ！もってきてくれるから」と、客としての態度をとるといったように、普段の生活とは異なる社会の中の人としての役割を取るという姿が観察された。

これは、社会生活を営んできた高齢者の態度のとり方の可能性のひとつとして考えられる姿勢であるといえる。

しかし、その方をよく知る介護職員が「驚いた」と感じるぐらい、ひとつの建物の中で生活のほとんどを完結させている痴呆性高齢者は、施設において社会的な自分の位置づけを変化させることなく生活しているということが現れているものと考えられる。立場が硬直するということがファミリーレストランレスにつながることであり、外出中に普段の生活を離れて社会における一個人として、役割を果たせる・演じられるということが、外出の効果として挙げられるものとする。

3) 普段よりも食事摂取の量が増える。

顕著に見られたもののひとつとして、普段食事の摂取量の少ない方であっても摂取する食事量が、増加するということが挙げられる。普段食事摂取量の少ない痴呆性高齢者が、「注文した天ぷらうどんを残さず食べた」というように、普段では考えられないような量の食事を摂取できるという事例が、数件見られている。これは、外出しているという状況のなかで、気分が変わる、自分のほしいものが食べられて食欲がわく、周りの視線が意識され最後まで食べるべきという意識が働くなどの心理が表現されたものであるという見方ができるだろう。このことについては、食事摂取量が増えるということが、必ずしもよい結果に結びつくということではなくまた、今後外出の中で食事摂取量が増えるという可能性があるということを念頭において、今後のかかわりについて検討していくべきものであると考えられる。

4) 普段トイレの利用回数の極端に多い方が、外出中は1回のトイレ介助で過ごすことができた。

また、極めて個別的な事例ではあるが、夜間実に20数回トイレに立つという痴呆性高齢者が、外出中は1回のトイレ介助で過ごすことができたということが見られた。

このような結果にいたった理由については、推測の域を出ないものの、普段の生活において自分の役割を十分に発揮できておらず、それがトイレ利用という形で表現されていた可能

性を示唆するものと考えることができる。検討のうえ個別のアセスメントとケアプランにつながる具体的な事実のひとつとして評価すべきものである。

(2) 外出支援の副次効果

外出支援を進めていく上での委員会や、外出支援委員からのアンケートの中から、外出支援に取り組んだことによる副次的な利益について報告された。これらについてもボランティアが、実際に外出支援をするためにかかわる上で自覚しておくべきことであると同時に、ボランティアとしてかかわるうえでの方向性や、ボランティアとしてかかわる意義を提供するものであると考えることもできる。

以下に、結果から考えられる外出支援の副次効果について考察する。

1) 外出支援に取り組んだことにより、アセスメントの視点が広がった

外出支援に取り組んでいくために必要な利用者に関する情報について職員が考え、評価するということが現れ始め、結果としてアセスメントの視点の広がりが見られたとの報告があった。例えば、平らな施設の床とは違い、でこぼこで危険の高い外の道路で歩ける歩行機能を持った人であるのか、細かい足のあげ方などについても興味を持って観察できるようになったという報告が得られている。生活の場を広げていく上での新たな情報の必要性の認識といえるが、同時に普段のアセスメントとケアプランに関する振り返りを伴うことから、視点の深まりと広がりが見られているのではないかと考えられる。

2) 普段見られない利用者の一面を見ることで利用者に対する理解が深まった

また、外出支援において普段食欲のない方が、望まれる食事摂取量を摂られる、施設における普段の生活と違う役割を取り、いきいきとしているという状況を目の当たりにすることで、利用者に対する理解が深まったという意見が得られている。またこのことは、職員が外出支援を行うモチベーションにもつながることであるということが、施設において本研究とは、まっ

たく異なる場で外出支援に取り組む職員が現れたという議事における話題が出てきたことからわかる。

3) 外出支援を目的として積極的に利用者の情報を得ようとするようになった

上記2つの副次的効果に大きく関連していると考えられるが、さらなる取り組みに向けて、積極的に利用者に関する情報を得ようとするようになったという得るだろう。

4) 家族が利用者の外出の様子を知ることで、痴呆や本人に対する家族の理解が深まった

また、外出中に撮影されたビデオを家族が見ることによって、現在の利用者の様子について新たな一面があることを発見できている。外出して、ある程度の距離を歩けることや普段食べないものを好んで食べている姿を見たり聞いたりすることによって、ともに暮らしていた時の様子だけではなく、そこから変化・発展した利用者像を描き家族が利用者を理解するための機会のひとつとして活用されるということが見られた。

(3) 今後の実践における課題

外出支援の委員となった職員に対して、外出支援の取り組みが終わった時点で今後の取り組みの課題を挙げさせた。結果、以下のような課題が今後検討を要するものとして挙げられた。

1) 業務の中でどう組み込むかに関する体制や人手の確保の問題

まず、介護職員のなかで多くみられた課題として、体制の検討と人手の確保ということがあげられた。限られたスタッフの中で、フロア外でまったく人手として期待できない部分に人材が振り分けられることになることから、負担は大きく、長期間継続した支援として確立していくためには、十分な検討が必要である。もちろんここに対応できるひとつの資源として、今後ボ

ランティアが活躍できる可能性がある。今後は、そのボランティアをどう育成し、現場に入り込んで定着できるかということが課題となる。

2) 利用者の安全を保障するための保険の整備や環境アセスメントを含めた事前準備のマニュアル化

また、外出支援を進めていく上での、安全の確保の必要性が課題として挙げられた。新しい取り組みにおける安全の配慮は、職員の意識として欠くことのできないものである。特に外出支援については、施設内のような危険の少ないしつらえに必ずしもなっていないところにあえて出かけるという捉え方もできる。このことが、取り組みをやめるための口実にならず、どう進めていくかということにうまく還元できるためには、現場で働く介護職員がすべての責任を持つという考え方でなく、相応の保険等の準備、契約方法の検討、などを含めて施設全体で取り組みものとして位置づけられ展開されていくということが課題となると考える職員の意見が反映されている。

3) 外出に際しての費用についてだれが、どのように負担するかの問題

また、外出支援において、利用者の希望に応じ、食事、移動、入場料などに金銭的な負担がかかることとなる。これらについて、どう考えどう費用負担について考えていくかということが、職員の立場から考えられる課題として挙げられた。特に職員の負担の考え方として、施設が負担するのか、利用者がわが負担するのか、それとも取り決めを設けてそれに従う形にするのかということを実情に沿って、明確に位置づけることが、取り組みを継続させる条件としても必要であるとの考え方が見られている。

4) より自然に動機付けられた外出を生活の一部として組み込むこと

また、より自然に動機付けられた外出を生活の一部として組み込むことについても課題と

して挙げられている。今回の外出支援については、施設における生活の中に外出する機会を落とし込むということを重視しているが、取り組みにおける体制、方法を十分企画した上での計画性の高い外出が中心となっているといえる。

生活の継続性という視点から外出について考えたとき、計画した上での外出は、イベントとしての役割を持つものであるといえるが、本人の普段の何気ない生活に根ざした無意識の外出とはなっていない。しかし、このような無意識的に行われる外出・居場所の移動は、心理的にも、生活を豊かにする上でも意味を持つものと考えられる。そのような観点から、今後の課題として、例えば、「洗剤が切れたから買いに行く」というような、日常的な暮らしの継続の中にある外出についても検討し、実現できる方策を模索する必要性が求められていると考えられる。

5) ボランティアの活用の可能性

外出支援を行う際には、施設の中での行事と異なり、完全にフロアからスタッフがなくなるといった状況となる。施設内での行事であれば、いざという時には、すぐに駆けつけ状況に応じて対応をする事が可能であるが、外出となるとすぐに人手を確保する事が困難になる。また外出する際にも、極力痴呆の高齢者を見る目を増やす事が、リスク回避につながる。恒常的な外出を実現していくには施設のスタッフ以外の社会資源をうまく活用する事が求められる。その一環として、ボランティアとの協働は、大きな一助となることは間違いない。ボランティアの活用の可能性としては、高齢者の外出に付き添い、必要な援助を提供する付き添い型ボランティアと、高齢者とスタッフが外出している際に、スタッフが抜けているフロアの高齢者に必要な援助を提供したり、業務の補助を行う居残り型のボランティアという2つのボランティアの可能性が示唆された。どちらのタイプのボランティアを適用するかの判断基準は、①ボランティアを申し出た人の希望、②ボランティアの介護技術、③痴呆の高齢者の希望、④ボランティアを申し出た人の外出先に関する知識などが考えられる。また付き添い型のボ

ランティアのメリットとしては、①痴呆性高齢者の楽しむ姿を直接見ることができ、ボランティアを行う達成感がえられやすい。②フロアの中にスタッフが多く残る事ができる。③地域の情報が得られ、活動の幅を広げやすいなどが考えられるが、ボランティアの力量がある程度ないと、安全で快適な外出にするということが難しいという課題が残る。反対に居残り型のボランティアのメリットは①普段から顔見知りのスタッフと外出でき、痴呆性高齢者が安心感を持てる、②スタッフが直接外出の中でアセスメントを深める事ができる、③スタッフ教育の場として活用する事ができる、④外出支援のための知識・技術を持つボランティアがいなくても外出支援を実践できるなどのメリットがある。ただし、フロアから正規のスタッフが抜けることが影響を及ぼす事があるということが課題となる。どちらが、好ましいという事ではなく、上記のことを考慮に入れた判断が求められる。

6) 外出ボランティアの事前研修のあり方について

施設における痴呆性高齢者の生活は、高齢者用に作られたしつらえの中で営まれており、移動に際しては、地域の中を移動するのと比較すると安全で注意点が少ないものといえる。施設の外は、痴呆性高齢者にとってなれない環境であるだけでなく、施設と比べてさまざまな障害がある。そのため外出における痴呆性高齢者の支援もよりレベルの高い技術が必要になる部分が多い。いかに、ボランティアが外出支援をサポートするために必要な技術を習得するためのカリキュラム案を作成した。ポイントの一つとしては、バリアフリーでない環境への対応の技術をマスターするための動作介助の研修を行なうべきであると考えられる。またその際には、車椅子体験などの「体験」をできる内容を盛り込む事で、問題意識の醸成とボランティアを行う動機付けを高める事が大切である。また、痴呆の知識と同時に、痴呆の高齢者が地域における生活を継続していくことの重要性について焦点化した内容にすることで、さらにボランティアとしての動機付けが高まる事が考えられ、また、痴呆性高齢者が外出

する際に行うべきサポートについて、ボランティアが自分で考えて対応することが可能となる。

以下のカリキュラムの妥当性については、今後の研究で精査していく必要がある。

単元名	単元のねらい	時間
研修会のねらい	① 研修会のねらいについて理解してもらう	15分
自己紹介	② 参加者がどんな人かを簡単に知る ③ スタッフがどんな人なのか知ってもらう ④ ボランティア同士が仲良くなる	30分
仲間作り演習	① ボランティアとスタッフがある程度打ち解ける ② チームワークの重要性を知る ③ ボラもケアのチームである事を理解してもらう	90分
痴呆と痴呆の人についての基本的理解と接し方	① 痴呆に関する知識を得てもらう ② 痴呆の人への接し方を理解してもらう	60分
お昼ごはん	① 栄養を補給する ② 休む	
移動のための介護の技術（実技含む）	① 車椅子の使い方を知る ② 歩行の介助の仕方を知る ③ 実際に介助を体験してみる	90分
今後の活動の仕方とぜひ協力してほしいこと	① 外出の意義(痴呆性高齢者の地域生活の継続の必要性)を知る ② ボラに求められている事を知る ③ ボランティアの活動の仕方を知る	60分
質疑応答	① ボランティアが求めている事を知る ② 一日の研修の再理解をする	30分

(4) 外出支援環境アセスメントについて

外出は、施設に生活する高齢者が自ら地域にアプローチする行為と捉える事ができる。それをサポートしていくに当たっては、事前にもしくは、外出しながら環境をアセスメントする事

が重要になる。ここで注意したいのは、環境アセスメントは、単に安全を確保するために危険な場所について確認するというのではなく、地域と痴呆性高齢者がつながる機会であり、心理的にリフレッシュする機会でもあるという側面を忘れないという事である。そのため、環境アセスメントでは、a.外出する際のリスクとなりうる環境の洗い出しと対応策の確認、b.外出する痴呆性高齢者が楽しめる可能性のある環境の確認、c.目的地や寄り道の場所になりうる社会資源の把握の3つの側面があるということをおさえておく必要がある。これらについて、それぞれアセスメントすべきと考えられる内容について列挙する。

1) 外出する際のリスクとなりうる環境の洗い出しと対応策の確認

外出する際のリスク回避のために確認しておくべき内容については、地面の凹凸が激しくないか、地面の傾斜が急ではないか、地面の素材(アスファルト、タイル、土等)が、すべりやすかったり、硬かったりしないか、車の通行状況は激しくないか、道路の広さは通行に十分な広さであるか、見通しの悪い場所はないか、距離は遠すぎないか、車椅子が通行できるか、階段はないか、あるとしたら段差の高さはどうか、また車椅子用のスロープはあるか、トイレはあるか、トイレは洋式か和式か、トイレの広さは車椅子が入ることができる程度か等についておさえておく必要がある。そして、より安全な経路があれば、できる限りそちらを選択することが望まれる。ただし、これは外出しないための口実にするのではなく、危険があることを事前に確認し、対応策を立てるため、また、いざという時に落ち着いて対応できるための準備と考えたい。

2) 外出する痴呆性高齢者が楽しめる可能性のある環境の確認

外出は、生活の中で心理的にリフレッシュできるいい機会である。外に出ている中で楽しめる可能性があるのではないかとと思われる環境についてもアセスメントをしておく必要がある。具体的に例を挙げると、花がきれいなところ、景色がきれいなところ、子どもが多いところ、痴

呆性高齢者が以前行ったことのあるところ、外出する痴呆性高齢者が興味を持っているところ、新しくできた商店、動物が多くみられるところなどがあげられる。また、この楽しめるところについては、外出を経験する中で、その人なりに楽しめるところが見つかる事が多い。外出後に、どのようなところで楽しんでいたかを確認し、個別に記録しておくという事も重要である。

3) 目的地や寄り道の場所になりうる社会資源の把握

環境アセスメントする上では、目的地となりうる社会資源について把握しておくという事が必要である。そうすると、例えばすし屋に行きたいという要望があったときに、近くて安いすし屋か、遠くて高いすし屋か、回転寿司かという要望にすぐに対応する事ができる。また、そのようなアセスメントをしておく、単に希望の場所に行こうというのではなく、スタッフがこのような場所があるが行って見ないかという提案をすることもできる。

具体的には、目的地となりえるところは、例えば、コンビニやスーパー、デパート、郵便局、銭湯、八百屋、駅、お墓、実家、動物園、公園、役所、美容院、病院、薬局、電気店、すし屋、ファーストフード店、ファミリーレストラン、商店街など無数にある。これらについてあらかじめ列挙しておくとなると大変な労力となるが、目的地となったときにある程度の記録を残しておく、その後の参考になって、外出に参加していない職員や新人職員が参考をする事ができる。また、目的地とならなくても、目的地までの道のりの中にあるベンチの数と位置、自動販売機の数と位置、トイレの数と位置、形態については確認しておくといよい。

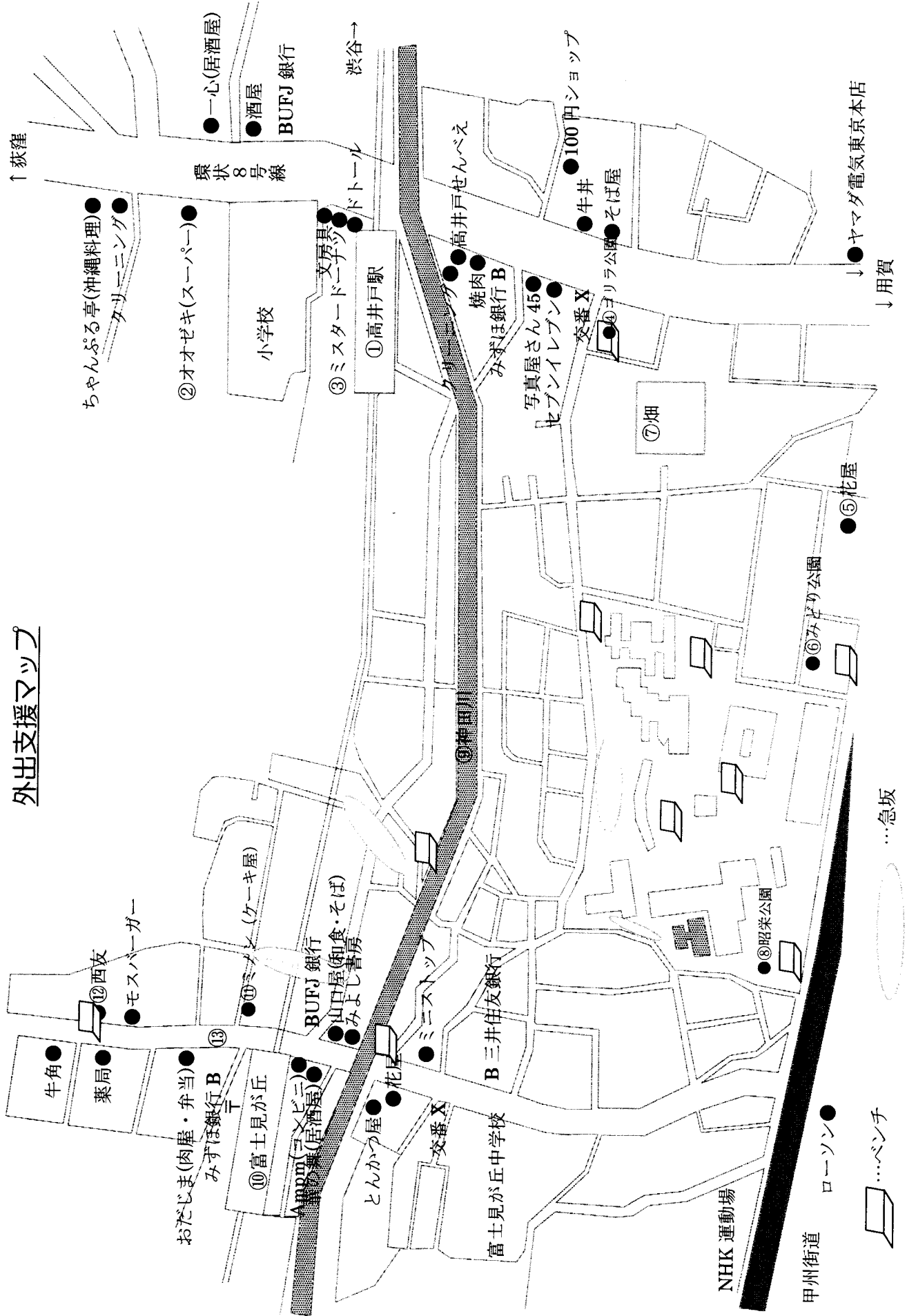
また飲食店については、場合によっては、痴呆性高齢者が食べられない形態やメニューしか準備されていない可能性がある。内容と値段についても確認しておく計画を立てやすい。さらにそれぞれの目的地については、居住している施設からの所要時間が分かるようになっていると望ましい。これは、もちろん高齢者とともに歩いたときにかかる時間で計算する。

今回は、特に施設内と施設近隣の環境について、スタッフで協力して、上記のような視点で

地図を作成して情報の周知を図った。その一例について、図に示した。

図の内容については、目的地ごとに、一枚のシートを作成し、それにトイレや入り口の状況、
楽しめそうな部分、その他特記事項を記入するという方法も考えられる。

外出支援マップ



場所(徒歩での所要時間)	入り口	トイレ	みどころ	その他
① 高井戸駅 (20分)	入り口に小さいかスロープあり。歩行なら広さはいいが車椅子だと少し狭い。	トイレはあるが、歩行が可能な人のみ車椅子の方は無理		駅前、自転車の駐輪と通行が多く、通行に注意が必要。
② オオセキスーパー (25分)	入り口は階段とスロープあり。	トイレは段差無し(入り口までは車椅子可だが、中までは無理。歩行が可能であれば使用できる)。	みどり寿司やパン屋あり。	店内駐車場までのエレベーターあり。
③ ミスタードーナツ (20分)	段差無し	トイレ小さく車椅子では使用できない。		
④ ゴリラ公園 (15分)			桜の時期、緑色の桜が咲く	ベンチあり
⑤ 花屋 (10分)				店員さんがとても対応が良い
⑥ みどり公園 (10分)				ベンチ多数あり。公園の隣にケーキ店がある。
⑦ 畑 (13分)			都会では珍しい畑がある。	
⑧ 昭栄公園 (5分)		トイレはあるが和式である。		ベンチが数箇所にある
⑨ 神田川 (10分)			鯉が泳いでいて、興味を持つ人が多い。カマガモもいる	神田川沿いは、自然もあって雰囲気の良い評判が良い
⑩ 富士見ヶ丘駅(15分)	階段しかない車椅子では利用が難しい。	駅を出たところにある。		
⑪ ミノン(ケーキ屋 (18分)	段差あり。狭い。車椅子では難しい。	洋式トイレあり。		薄暗い
⑫ 西友(20分)	段差あり。	2階にトイレがある(便エスカレーター)和式・洋式ともあり。		ベンチがある。自販機もある。
⑬ 駅前道路				歩道が狭く、車の往来が激しい。通行に注意が必要。

⑦ 畑



⑨ 神田川周辺



⑨ 神田川周辺



⑩ 富士見ヶ丘駅改札



⑩ 富士見ヶ丘駅 入り口



⑩ 富士見ヶ丘駅入り口



第3章 痴呆性高齢者の外出支援における対応(外出支援マニュアル試案)

日本社会事業大学下垣光

1. 外出支援における対応の基本的背景

1) それまでの生活から切り離された施設生活

施設環境は、それまでの生活環境とさまざまに異なる特性がある。それは、それまでの自宅から離れることを余儀なくされる点から始まる。それは料理をしたり、掃除をしたり、また好きな趣味活動をしたりすることや、近所の行きつけのパチンコにいたり、囲碁や将棋にいたりするなどの自宅やその周辺に広がる生活や活動が出来ない状態をもたらすこととなる

施設生活は、また集団的な生活を過ごすことをもたらす。自宅では自分のペースで活動出来る。誰かと話をしたいときには電話をかけたり、遊びにいけばいいし、避けたければ、無理をしない。また食べたいときに食事をしたり、小腹がすけばおやつを食べたりする。しかしこのような行動は施設で生活するときは、周囲の人にあわせたり、また施設の時間割や日課にあわせることが必要となる。集団的な生活は、それまでの生活とは異なることが余儀なくされるといえる。

2) 生活環境とケアを意識する

しかしこのような生活環境が、老年期特有の痴呆性疾患のある高齢者にとって必ずしも効果的ではないことが、近年注目されている。

痴呆性高齢者は、そもそも自分から環境に適応するために活動したり働きかけをしたりする能力が低下している点に特徴がある。我々は通常、引っ越しをしたりするなど、それまで住んでいたところから新しいところに移ったときには、自分から様々な工夫をこらす。部屋の壁紙を張り替えたり、自分のお気に入りのものや思い出の写真を飾ったりするなど自分が居心地のよい空間にするために変えていく。しかしながら痴呆による機能や能力の低下はこれらの活動が自分一人では出来なくなる傾向がある。

このような痴呆の問題は、記憶や見当識の機能低下に加えた、計画的思考や判断力などの低下、また意欲や自信などの喪失などの感情面の問題などの様々な側面が引

き起こしていると考えられる。具体的に特別養護老人ホームに入所したと考えてみる。部屋の広さ、窓からのあかり、ベットの向き、これらの部屋の様相と自分の居心地の良さづくりを、自分の判断により計画していくことになる。痴呆による様々な認知機能の障害はそれを阻害していく。

この問題は、当然在宅で一人暮らしをしている痴呆性高齢者にとっても無視できないといえるが、急激な環境変化がないかぎり、かろうじて表面化しない場合が多い。つまり生活の継続性があることが、習慣化された活動などを維持していくことを可能にしていると考えられる。

したがって自分のペースで居心地の良い、適応的な環境を作り出すことができない痴呆性高齢者に対してその環境を意識したケアをしていくことは、重要な意味をもっているといえる。

3. 外出支援の準備

1) 「入所前までの生活や活動を事前に把握している」

痴呆性高齢者への外出は、その効果として第一にあげることができるのが生活の継続性の維持がある。私たちはそれまで親しんできた生活において、外出は欠くことのない一部であり、仕事や趣味活動や友人との交流などの時間が割かれるのも外出時である。特に痴呆性高齢者は徘徊などの行動面の問題があるために、しばしば施設において最も制限される、つまり「自由に外出する」ことができない傾向がある。このような場合に、外出をする機会を提供することは、生活の継続性を高めるために最も効果的な一面があることを示唆している。

したがって、その対応は、ひとりひとりのそれまでの活動や自宅の近隣の生活環境を、計画の段階で十分に把握していることが必要となる。

2) 「情報の提供をおこなう」

また意欲や感情への効果を意識することも重要である。まずひとつには出来るだけその人の意向を尊重するということがあげられる。痴呆があることにより、どこにいきたいかがあっても、「特にありません」、「おまかせします」などの受け身的な言葉しか返って

こない場合もある。しかし行く場所の写真をみせたりすることや、家族からの情報収集をすることなどにより、積極的に行き先の候補を出すことにより、希望が生まれる可能性がある。

3)「ケアプランへの意識」

外出が、本人への援助活動として位置づけるためには、ケアプランにおける施設サービスとして組み込むことを考慮していく必要がある。そこではニーズにおいて「生活の継続性」や「感情意欲を高める」、「自己有能感や自尊感情を維持」、「社会的生活や交流の促進」など問題行動の軽減とは異なるニーズや長期・短期の目標を設定してあることが前提となる。これらの目標があることを達成するには外出による刺激は大きな意味をもつ。

しかし、実際にこの活動に参加した後に、その高齢者に大きな変化があるならば、そこからプランの見直し、ニーズや目標の新たな立て直しができるとも考えられる。

4)「外出先の状況を把握」

外出をすることは、さまざまなリスクを伴う。転倒の危険性は完全に避けることはできない。事前にはスタッフは、行く場所についての階段などの構造を把握していることが望ましい。高齢者向けに配慮された構造かどうかは、事前の調査の中心的なポイントである。また移動経路上の車いす移動に影響を与える段差の有無、食事やトイレについて実際の利用を想定しながら状況における問題点に応じたプログラムを考えていく。

しかしこの場合に注意した方がよいのは、危険性ばかりに目が行きすぎることにより、本来のその意義や効果を見落とさないようにすることがある。

5)「家族との関わり」

そのうえで、最も準備段階でおこなうべきことは、その対象となる高齢者の家族との関わりである。外出は何らかのリスクを必ず伴う。この可能性について十分な説明とそれについての書面による同意は前提となる。しかしこれはまた形式的にこの点ばかり意識して、家族に説明するならば、家族は単に「ひるんでしまう」だけになると考えられる。

そこでは同時に、外出から得られる効果などについての、施設側からの説明が十分にされることが求められる。

さらに可能であるならば、家族が外出に同行することができると、その高齢者の表情や行動にふれることにより、新たな一面を垣間見ることになる。そのことは施設と家族とのその後の連携を効果的に展開していくときに大きな支えになると考えられる。

4. 外出支援における実際上の配慮

1)「参加者の状態」

外出への参加は、当日の状態を見て判断することが重要となる。特に身体的な疾患や問題が大きい高齢者だけではなく、体調の不良を自分からいうことができない高齢者がいることを注意する必要がある。痴呆は、けがや骨折あるいは脱水のような状態があったとしても周囲に痛みや訴えたり、自分から適量の水分補給をしたりすることが出来ない場合がある。当日の参加には周囲の観察も必要となる。

2)「活動の時間の配慮」

外出は、予想外の時間をとることが多い。車での移動は交通渋滞にまきこまれることもある。また歩行での移動は、思ったより時間がかかり、疲労への配慮も必要となる。また買い物とかに夢中になり同じ場所に、計画外に長くいることもあると考えられる。高齢者の状態をその場で客観的にみることにより、柔軟に計画を変更することは必要不可欠である。しかしそれは同時に関わるスタッフの都合に左右されすぎないことも求められる。限られた時間なかでの参加している高齢者の笑顔などを大切に、その一瞬の場の持つ意味を高齢者とスタッフが相互に味わうことが本来の意義のひとつでもある。

3)「施設との連携」

予定外の行動や帰園の時間の変更などは、基本的には園との連絡調整が必要となる。また帰園時の食事や対応は、それまでの外出時の状況の与える影響が無視できない可能性がある。活動内容による感情意欲がどのようであったのか。疲労がどの程度あ

ったのか。そして何か楽しそうだったのか。

帰園後の行動が、時にはマイナスの状態、不穏などを引き起こす可能性もあるかもしれない。しかし外出時の状況がその後の対応にヒントを与えることも考えられる。適切な情報伝達が不可欠と言える。

4)「写真や映像の記録をとる」

写真などの記録は、外出の効果を維持していくためには必要となる。写真や映像など撮影したものが、その後スタッフや家族と共に「眺める」ことにより、その楽しさや思い出を振り返ることが可能となる。それは時には、次の外出への「生活のハリ」へとつながる可能性も否定できない。また参加していない家族へみせることにより、家族への情報提供にもなる。

これらの外出における直接的な対応の特徴に加えて、大きな意味をもっているのはスタッフの「主体的な」意識であると考えられる。日常的な介護業務に加えて、これらの活動は、自分たちが高齢者や家族と共に「企画」していくことを求める。それは施設でおこなっていたそれまでのバスハイクなどの「行事」とは、一線を画する。個々の高齢者のそれまでの生活歴を尊重し、その個人の感情や意欲に働きかけるニーズに対する活動として組んでいくことは、個別性を尊重したケアに中核ともいえる。それを新たな視点で取り組むことは高齢者だけでなく、スタッフにとっても大きな意味をもっていると考えられる。

まとめ

本研究は、痴呆性高齢者の地域生活支援に向けた外出支援の意義を明らかにし、そこでのボランティアとの協働のあり方について検討した。その結果、3特養 1 グループホームの利用者を対象に、合計で 14 回、52 名の外出支援を実施した。特徴的な外出時の反応として、いつも口数の少ない痴呆性高齢者(以下「高齢者」)が、積極的に他者とのかかわりを求める、施設生活とは異なった役割をとろうとする、普段よりも食事摂取量が増える高齢者がみられるといった様子が確認された。

また、外出支援を行ったことによる副次的な利益と考えられるものとして、①介護スタッフが外出を行うことを意識する中で、外出に際してどのようなことをアセスメントしておけばいいかということを考える中から、介護スタッフのアセスメントの視点が広がった、②外出支援を行うことで、利用者に活発に発語が見られたり、施設とは違う役割を取ったりといった普段見られない利用者の一面を垣間見ることができ、利用者に対する理解がより深まった、③職員が外出を意識することで、外出支援を行う際に有効、必要と思われる利用者の情報について積極的に得ようとするようになった、④対象となった痴呆性高齢者の家族が、痴呆性高齢者の知らない一面に気づき、施設生活の状況を把握でき、本人や痴呆に対する理解が深まったといった効果が見られた。

さらに実践における今後の課題として①業務の中でどう組み込むかに関する体制や人手の確保の問題、②利用者の安全を保障するための保険の整備や環境アセスメントを含めた事前準備のマニュアル化、③外出に際しての費用についてだが、どのように負担するかの問題、④利用に際しての契約の一項目として外出支援に関連する項目を立てられるか、⑤より自然に動機付けられた外出を生活の一部として組み込むことが抽出された。また以上を踏まえて、外出支援を行う際の注意点・導入の方法に関する外出支援マニュアルを作成した。

さらに、これらの結果から、外出支援におけるボランティアの必要性について指摘し、円滑な導入に向けてのボランティア養成研修カリキュラム案が作成された。

以上により、外出支援の必要性和ボランティアの活用の可能性が浮き彫りになったといえる。外出は、高齢者の心理的安定と活性化に作用すると同時に、

取り組みの進行により、介護職員のスキルアップ、家族の利用者の対する理解の向上という側面からの効果も期待できるであろうことが考察された。今後の課題として、付き添い、居残りを視野に入れてボランティアの役割の明確化について検討すると同時に、実際にボランティアを導入していきながら、外出支援における地域のボランティアの活用方法やボランティアを導入することによる外出支援実践課題の変化、改善等について実証的な検討を進める必要性について検討していきたい。

ボランティアの育成・活用に関する研究委員名簿

是枝 祥子	大妻女子大学
下垣 光	日本社会事業大学
松野 有希子	多摩老人医療センター
山本 里美	南陽園
谷 烈子	南陽園
中島 邦利	南陽園
小川 真由美	南陽園
藤井 加奈	第二南陽園
坪田 泉	第二南陽園
鈴木 孝宗	第二南陽園
石出 徹	第二南陽園
佐々木 博美	第三南陽園
山本 直希	第三南陽園
酒井 直美	第三南陽園
清 澄子	グループホームひまわり
中島 健一	高齢者痴呆介護研究・研修東京センター
中村 考一	高齢者痴呆介護研究・研修東京センター